４、大罪の種子

　高度約五十一を陽折牙はゆっくりと航行し、時折雲に隠れながら中央大陸上空を目指した。その下には乗艦する少年二人の故郷ケテルマル王国があるのだが、帰郷するためなどではない。そもそも彼らはとっくの昔に、仕事も親兄弟のことも、浮世のことは全てほとんど意図的に忘却しているといっても良かったし、少女達がそのことについて話題にすると、まるで遠征の兵士が望郷の念による士気低下を恐れる上官に禁じられてでもいるかのように、共同戦線を張ってそれとなく他の話題に誘導してしまうのだった。実際、下界では家族でも社会においても大騒ぎになっているのであるが、二人が手に入れたものの魅力はあまりに大きく、それについてどのように対処していかねばならぬのかという宿題が彼らの大脳の上に重圧をかけている今、足元の瑣末な問題、しかも絶対に厄介になるしかないような物事から目を逸らす要因を喜んで受け入れるのはむしろ自然なことであったろう。さらに両少年の傍には神秘的な月と輝ける太陽のような二人の女神が雲の波を切る共通の狭い領域内に燦然と降り立って在るのだ。彼らにとって今や現状こそ文字通りの天国であり、これを邪魔するあらゆるものは排除されねばならず、それを助けるあらゆる手段が採られた。

　而して、現在の航路は子供の操艦らしく至極単純で、直線的にパムタエの首都を目指すためである。もはや彼らの船はこれを強奪した沈星側だけでなく地上勢力にすら敵視される可能性があり、しかもあらゆる周囲の人間には全く理解できないような理由で稼動しているのであるから、まともな味方などいないし、凡てが敵であると考えたほうがよさそうだった。ゆえに、別にのんびりしたいわけでもないが、飛脚便でもあるまいし、フライバイ恒星サイの発する磁力線の渦に自ら巻かれることで超高速を得るのような目立つ手法を取るわけにもいかない。地上側を味方につけようと考えていたであろう皇女には大いに他の三人を叱責する理由がありそうなものだったが、彼女は今の成り行きによる状況を喜んでいるようですらあった。ミャンレ・フリスロッツは慣れ親しんでいる酸素の薄い空気を胸いっぱいおいしそうに深呼吸し、他の者達が艦内で休んでいる間もほとんどいつも艦首で前を見晴るかした。そして、自分の後ろでは純粋だが気も頭も弱い砂魚の少年が自分を黙って見つめているのだろうと想像し、髪飾りを小さな手でしならせるのだった。

　ところが、実際にはカルツ・ピルスは再び年上の女性の魅力に心の靄を吸引されるようになっていて、それをワナ・クヴァイに悟られぬようにするのが精一杯であった。それに逆行するように、ワナが彼に何度も言い、彼も話の流れ的に頷いてしまったことがあった。

「俺達がんばろうぜ。君は皇女様なんだろ、僕は…　いや、まぁ、そういうことさ。いいか、俺達の相手は大物だ。多分世界中でもあんな凄い美人を狙わなくちゃいけないのは、俺達くらい。これは幸運というよりもむしろ不幸だね。それは謙虚に認識しなくちゃいけない。とにかく大変なんだから。でも負けられないぜ、男としてな」

　おいこら、俺だってあの人を…　とピルス少年は思いつつ、何を勘違いしたか、俺でもミャンレならあちらよりはまだ簡単に付き合える、ということはミャンレは僕のことが好きだけど僕は他の人が好きで困ったな、などとぐちゃぐちゃに妄想し、一人で悩み始めてしまった。

しかしそれにしても、彼も自分の陥っている恋が状況に押し付けられただけの、不毛で不能的なものであることを嘲りの混じった無意識の声から聞かないわけにはいかなかった。例えばそれは陽折牙に設置されている多くの工具類や機器、まだ何も生けられていない花瓶などからも発せられたのだが、もはや彼はそれらを腰道具と同じ末路に送ってやろうとはしなかった。彼は、『あいつには可哀想なことをした。いつか取りに戻って埋葬してやれないだろうか』と空想すらしていた。

「…お前らの言うとおりかもしれんなぁ。本に書いてるように、あいつの言うように『がんばる』ことが、本当に正しいのやら。僕は、本当はもっと違うことを見つけなくちゃいけないんじゃないのか」幼いときに盗み見た、父親の成人向け劇画本とこの前の恐るべき観察を参考に空想した、星者の娘との性行為を妄想の世界に展開していた彼を*『相変わらずの変質者め！』*と罵った便座器を眺め、砂魚の少年は問うた。しかし、そういった具体的なことには、モノ達は何一つ答えてはくれないのだった。*『んなこと自分で考えやがれ、バカ』*と、代わりに小さな裸の白光照明が言った。彼は溜息をつき、再び空想しようとしたが、うまく集中できなくてやめてしまった。それに、うっかりとトイレに鍵を掛け忘れていたことも思い出したのだ。冷や汗をかきながら彼は左手やら右手やらを握ったり閉じたり捻ったりしながら然るべき処置を終え、通用口を不安そうに見渡した。誰もいないようだったが、これは自分の精神が少なからず現実から乖離して、とんでもない恥をさらしかねないという恐怖感を少年に与えた出来事の一つであった。

　それからはもう、彼は全ての異性的なものに対する欲望を抑圧するようになりはじめた。彼女らは純粋で天使のような存在であるから、自分が思うような汚いことには従事しないし、少なくとも自分の中でそうすることは絶対にできない。そうするのであれば自分こそが世界で一番憎らしい存在であり、胸に天板切開用の自動小刀を突き立てて中に悪魔の腫瘍でもないかどうか検査してみなくてはいけない――知性を開発したために種族数維持のためのシステムが高度な精神によって無闇に干渉されてしまうというジレンマが生まれて以来、良心や悪の心などと呼ばれる実は同位体的存在の集合的無意識の必死な努力により、様々な規範や心象が生み出され、時としてそれが御伽噺となったり社会風俗そのものとなったりしてきたのであるが、今またこの小さな端末においてそのバランスが崩れつつあった。この努力たるや両側が絶えず重さの変動する平衡板の真ん中に立ちつくしてそれを動かないようにしなければならないような仕事であったから、それが少々狂ったからといって従事する事務員達をどうか叱らないでやってほしいものであるが――まずは取り急ぎ対処のための処方が取られていく。そのせいで、魂を守護する霊のような他人の思念磁場と取引し、自己を刺激して理不尽な抑圧を解除させてもらおうとしているのではないか、と思われるような現象が度々と彼を襲うこととなった。

　例えばカルツ・ピルスが中央の座席でぼんやりしているとき、外で仲良くじゃれあうように話し込んでいた男女が室内にやってきて、彼を両側から挟んだときなどがそれである。自分達も陽折牙の主要な操縦方法を覚えておいた方が今後役に立つのではないか、というのだ。

今この三人の心的な中心軸ではあるが、船の航跡同様、ただ意味もなくふわふわと浮いているような乗組員達の中で、最もここにいる理由のないキィフではあるが、その理由のなさが彼女をここに据えているといっても良い。つまり、彼女はそれまで無意識中で強く強く拒絶していた邪教の巫女であるということに哀しくも依存せざるをえなかったので、それが失われた以上は、カルツが彼女の魂を呼ぶために咄嗟に思いついたように、新しい人生の取っ掛かりを見つけるまで自由を尊ぶ風神のお膝元に匿われているより他はなかったのである。

　いずれにせよ、すでに四日ほども寝て遊んで食べて寝て起きて…を繰り返したことで、互いにあまり遠慮するようなこともなくなってしまったし、羽の生えた級友と対照的に考えすぎて空回りする性質のカルツ・ピルスではあったが、さすがに誰しも備わっている適応本能によって、多少居心地が悪いにせよ自分の位置づけを確保していた。実際に好きあうのはワナに任せ、自分はただ有限ではあろうが状況の許す限り彼女を憧れの目で見つめられればそれでよい、といった妥協点である。だからこのときも、彼は胸を暗く地の底に沈めたように感じつつも、死ぬほど辛いというほどではない。こうしてみると、苦しさや勝手な空想、自分の目を見てくれたとか何かふいに無視してワナを探しにいったようだったとか、そういった全ての辛いことがむしろ経験したことのない痛痒いような快楽として彼の胸を這いずるのである。しかし彼の自我がそれで満足でも、その無意識はそれを不健全と感じ、許さないようであった。

「ねぇねぇ、これって…　どうやって照準を合わせるの。このスイッチは何？」雪聖の娘に問われ、そんなこといわれても陽折牙が全部やってるんだからわかりゃしないよ、と思いつつ、いつも適当にやっていることを身振りで表しながらカルツは不器用に説明し始めた。

「何だそりゃ、ある意味誰でもできるけど、…ちょっとくらい勉強しておいてくれよ。興味とか沸かないわけ？」とワナが腕組みしながらあきれ返ったように言った。グサッとくること普通にいいやがるんだコイツ、と思いつつも、確かにあまりにもずさんすぎると彼は自分でも感じた。時間はたっぷりあったのに、何を俺はやっていたのやら。陽折牙が宝船だとかいいながら、全然意識してないときの方が大半だ。それ以外のときはどうでもいいことばかり考えている。本当に自分でも嫌になっちまう――だが、そんな辺りかまわず暗く落ち込む彼の表情に頓着せず、彼女ははしゃいで機械を動かし――と、キィフが細い操縦桿を誤って逆向きに捻ったとき、どこかで小さく『ポキ』と鳴った。

「あ。あっ、ああ…　何かしちゃったか…　も」雪聖の乙女は上半身をぐいと傾け、操作盤をあたふたと調べ始めた。そのとき、カルツの位置上全くやむをえないことながら、彼の手や腿に彼女の手が触れ、さわさわと冷たい感覚が彼を凍傷のように矛盾して熱くした。砂魚の少年は黙ってこわばっていたが、『何だ』と思って異物感のする方を見やると、脇から強引に台座の下を触ろうとしている彼女の左胸の柔らかさに、彼の肘が軽く刺さってひしゃげさせているような状態であった。『とんでもない…　僕は知らない』と彼は思い、しかし下手に動かすわけにも行かずただ黙って前を見て俯いたが、その肉体中の全神経はただ一箇所の感覚を一個の細胞ですら受け入れて解析しなければならないといった指令を与えられた、ばかげた機械となってしまっていた。

「おい、船に聴いてみたらいいじゃんか」とワナ。最近命令口調だよな、彼女の前だと格好付けようとしやがって…と口にもできず、考えてみれば嫌われてしまう理由を増やしかねない処にいる肘を逃がすためにも、カルツは身をよじり、いつも肌身離さない石を握って念を集中した。「…うーん、自分でもどこが砕けたかわからないけど、多分大丈夫じゃないか、って」

「何だよ、好い加減な奴だなぁ」ワナ・クヴァイは彼女の手を取るとまた外で雲を見ようと言って走っていった。『ちぇっ。じゃぁね、キィフ…』とカルツ・ピルスが目を一瞬上げたとき、確かに彼女は振り返って彼を寂しそうに見つめていたのだった。

*『あのコ、もう少し俺の構造を見たかったのに、あのガキめ』*と台座が呟いたので、彼は思わず自分の間抜けさを笑わずにいられなかった。すると、周りの多くの機器達も一斉に彼を悪魔のように嘲り、罵り、一緒に笑い始めた。優しい言葉は一つもなかったが、彼にとってこれほどの救いはそのときないと感じられた。笑い声はいつしか彼の中で酔っ払いの歌声のような、奇妙なリズムを取っていた*――なぁ、俺達屑だ、存在の屑だ。俺もただの道具だ。俺もただの歯車だ。俺も梵子力が通らなかったらただの鉄屑だ。なぁ、俺達屑だ、存在の屑だ。仲良くやろうぜ、世界に一つしかない俺達だから――*

　このような夢見心地の精神状態であったため、カルツ・ピルスは級友からの『共同作戦』の提案には、『俺達は生簀に大魚を入れて紙糸で釣ろうとしているんだな』という喩えを返すだけにしてやったのだった。その後『席を外しといてやる』といった、カルツからすれば恩着せがましい動きのせいで、彼は星の皇女と部屋で二人っきりになることが比較的多くなった。しかし変な勘違いがあべこべに働き、『そっちから話しかけてきたら応じてあげてもいい』とお互いに思っていたので、ほとんど無言であった。

　それでも、「あの二人が夫婦になったら一生空で暮らしかねないわねぇ」とミャンレが不意に思いついて独り言を口にしたときは、カルツが「ワナ無理だと思うけど」と言ったので、彼女は思わず眉を顰めて彼を振り返った。しかし、掴めるはずの視線の焦点は、ぼんやりとあらぬ方向の壁に定まっていた。

　空に特殊実験区域を設けなくとも、地上の放課後でもできるようなことに彼らがそれなりに懸命にかかずらっている間、新鋭艦は子供達に命じられたまま順調に航海を進めていた。ところが、ここで一つ問題が生じた。風の梵子力を吸引しながら推進するためにほとんど減少しない燃料計器をミャンレ・フリスロッツが恨めしそうに見やって指摘するように、彼らの共同生活を支えてきた糒や乾燥肉といった保存食がいよいよ底をつき始めたのである――無論、こんなものが一週間分も都合よく保管庫の中に入っていたこと自体が幸運であったのだが、無垢な子供達に『享受できるだけでも慎ましく感謝せよ』などとのたまうのは理不尽な道徳の押し付けというものである。

「口減らしとは言わないけどぉ、カルちゃん、そろそろご両親が恋しいんじゃなくて？」彼女は普段の例で悪戯と茶目っ気たっぷりに言ったが、ここ数日やけに急接近しているようにも見えるワナとキィフのことでさすがに気を悪くしていたカルツ・ピルスは、通例の弱腰で応じなかった。何がカルちゃんだよ、と彼は思った――昨日から勝手にそう呼んで。おかげで付き合ってると思われて、じゃあ俺達も、ってなことなんじゃないのかあいつ等――

「別にご命令なら降りますけどね、この船がどこに行こうと知らないぜ。宝玉とかって、俺達に何の得があるのかもよくわからんし」

「おお、そういえば何とかの水晶球？　アレって高く売れるってこと？」珍しく塔楼内で翼を磨いていたワナも、重要なことを思い出した様子で乗じた。彼がいつでもくっついていたいと思っている娘は、専用機が空調完備であったためにそれ無しの長旅には慣れておらず、休憩室で寝ていた。

「…太黒熱の真珠！　アンタ、女の尻ばっかり追いかけてるからそんなことも覚えれないのよ！」ミャンレはつかつかと飛竜少年の席に歩み寄った。『いけない、私ともあろう者が。落ち着いて彼らを操らないと』と彼女は思ったが、こみ上げてくる感情を抑えることがどうしてもできない。彼女に言わせれば『弱っちぃ愚かな奴』の御しがたい態度によって初めて感じ始めた重苦しい感覚が、男は操り道具と思っていた彼女を突き動かしていたようだったから、本来その難癖は別の少年に向くべきであるのに、この少女にはまだそれに面と向かう勇気がなかったのである。

「おいおい皇女さん、まだ会ってから十日くらいなのに、俺のことわかるのかよ。大体アンタだってなぁ…」だが、彼は良心が咎めたために言いかけてやめてしまった。それがかえって彼女を激昂させ、ミャンレは拳を半ば振り上げて地団太を踏むようにした。

「アタシが何だってのさ！　何だよあの女に金魚の糞みたいにくっつきまわってるくせに。バカじゃないの、死んじゃえばいいんだよアンタなんか」

「んだとっ…　この、煩いんだよ、！」彼は翼をぶるぶる震わせ、しまった、と思った。「何よ…　バカ！」というのがやっとで、ミャンレは青ざめて数歩後ずさり、さっと足音も立てずに外へと駆け出していった。

　カルツはこの遣り取りを見ながら『俺の台詞取りやがって』くらいにしか思わなかったし、ワナの言葉の意味が良くわからなくてしばらくぼんやりを続けていた。そして、やはり冷たく、『なるほど、あの人とは違うってことネ』と納得しただけであった。それでも彼は重そうに腰を上げた。口からは毒蛇が出て取り返しがつかないという絵本の内容を、頭の中でぐるぐる連続再生させながら俯いている級友のためというわけではないが、部内争いは良くあるまい、艦長として、などとまさにバカなことを考えつつ。しかし、お気に入りの船首で立ち尽くしているミャンレの背後に来たのに、彼は何を言うべきかもわからずにただ頭を掻くだけだった。

「ア、あなたも、そう思うんでしょ」こう言われて、またもぼうっとしていた彼はようやく、彼女が空を見ているのではなく、顔を下に向けて床に涙をぽたぽた零していることを知った。『泣かれても、ねぇ…』と、もう一人の女性に対する温かい感情とは全く違った言葉が彼の胸をよぎる。神秘的な宇宙の美少女、といった偶像崇拝的な心象が、早くも彼という『神官』を維持できなくなりつつあるようだった。熱しやすく冷めやすいという人類共通の性質は彼にも例外なく宿っていたし、それは時として非情ともいえるほどの態度を呈する。

無言の彼をミャンレ・フリスロッツは、可哀想なアタシを見てさぞかし胸がときめいただろうなどと考えて振り返ったが、少年は眉を上げて物珍しそうに、鼻水が垂れて無様に色を変えている口の上などを見て、思った。『あーあ、関わりたくないや』――彼はどうせ手に入らないあの人のこともきれいさっぱりあきらめて、地上の暮らしに戻るのも悪くないと思い始め、踵を返し――そうになったところで、ピタリと止まった。

『ミャンレって思ったよりヘボいのな。

…誰か、面倒みてやらないとどうなっちまうんだろ』砂魚の少年は表情を柔らかくし、冷たくなった自分の耳を押さえた。

「あっちで温かいものでも飲まない？　あ、俺の珈琲なんて不味くて飲めやしないって言ったよなぁ。うーん、俺も自分なりに不思議でしょうがないんだ、何で粉溶かすだけなのにうまくいかないのかなって」自虐的に笑う彼は、その胸元に少女が顔を埋めるようにしがみついてきたので、その場にすっかり凍り付いてしまった――確かに、甲板上がかなり寒かったせいもあるのだ。

「アタシ、アンタのが飲みたいんだ。早く作ってよ…」

　それからカルツ・ピルスは思いつく限りの様々な無駄口上で彼なりに慰めながらミャンレを下の階に連れて行き、起きだしていたキィフを交えてお茶にすることにした。…と、ばつの悪そうな顔をしてワナ・クヴァイも降りてきた。「あそこは凍えちまう。重力装置なんか良いから暖房何とかしてくれって頼んどいてくれよ、カルちゃん」呼ばれた少年の歯が浮くような表現を彼は用いたが、いつもは場の空気を読むのが不得意なカルツも、『OKOK、好きなように呼んでくれ』と思って頷いた。

　さて、砂魚の少年はカップを４つ並べてお湯を沸かしたが、ここで急に、もしこんな時に自分の淹れたものが不味かったら恐ろしく格好悪いし、皆にも悪い、と油汗をかき始めた。そこで彼は、喧嘩した二人がそっぽを向きつつもお互いを意識しあって他を見ていないことをそっと確認し、なかなか大変な準備だったというそぶりでちゃっかり自分も席に座り、それとなくキィフに以後を任せてしまった。その時カルツ少年は、ワナが自分の一番新しくて綺麗な羽毛を机越しにミャンレへ渡し、小声で「ごめんな」と言ったのを目にした。彼女は悩む間もなくさっとそれを取り上げ、髪飾りの左端についている短冊形の細工を折り取って彼に渡し、「私も」と口の端を緩めた。

『何かあったのね』『うん、でも単純な連中だからさ』湯気を立てたお盆を持ったキィフは、優しく彼らを眺めるカルツと目配せしあった。しかし、「あら、お上手。これからは毎日淹れてもらいましょ」と、もちろん選手交代にも気づいているミャンレが小悪魔的に愛らしく笑うと、彼は途端に慌てて左見右見してしまった――もともとこの乾燥粉末自体が美味いものではなく、要は誰が配分したものなのか、という問題なのではあったが。

　こうしてせっかく議題に上った航海の意義は再びうやむやにされ、砂魚の少年が、俺のおかげと言わないまでも一件落着だと胸の内で自画自賛したところで、本当に切迫していた課題が何ら解決したわけではない。それどころか、色々あったので皆腹が減ったとみえ、不味い不味いと言っていた保存食を節約するどころかどんどん食べてしまう。そのために至急、進路上で比較的危険の少ない場所で補給を受けなければならなくなった。陽折牙のデータベースを見ながら相談の末、彼らはフライロ大森林の中にある悪寒気邪悪な不定形人種の村スイロークに着陸することにした。

　海牛の場合に比べて空域外での離着陸も非常に静かで快適な新鋭艦であるから、まさかもう拠点が目の前のところで何かに引っかかってしまうとは誰も思わなかった。ここしばらく鳥空域内に住む機械生物や沈星由来の生物で、無害かつ飛行しているものは何でも『鳥』と表現されるの群しか映してこなかった陽折牙のレーダーに明らかに別種の、巨大な影が捕捉された。ただちに船室内は戦闘体制の画面に切り替わり、詳しくはその見方がわからない少年少女が見てもぞっとするしかないほどの敵艦隊の規模を詳細に解析し始めた。

「んで、ムルシヒ・ワパパってどこ。何で俺達を狙うんだ…」まだ肉眼で見える距離と高度にないのに、外に出てやはりすぐに戻ってきたワナが、キィフに問うように呟いた。

「エスバーヤエル同様、反沈星軍事支配連合の加盟国です。私の国とは敵対的でしたから、直接に盟主国から指令を受けたのでしょう」

「だったら、俺達に敵意がないってことをわかってもらおうぜ、連中は勘違いしてるんだよ」カルツは陽折牙を通じて無線で相手に呼びかけたが、一向に返事がない。「語地方語の一つ。この時代はまだ世界的な共通語が普及していない。じゃないと通じないのか、いや、打電でもやってるのに。それとも向こうの船は13隻もいて無線が一個もないわけ？」と彼は肩をすくめる。

「彼らの目的はどうせこの船の拿捕でしょ。空に入って速度を増せば振り切れないこともないけど、おなかも減ったしぃ…　話し合えないかな。一度上がって、近づいてみようか。駄目なら逃げて他の拠点目指そ」ミャンレの意見に皆賛成し、陽折牙は再び浮上した。

そこはすでにロッハロッハ沈星にかなり近く、無重力の濃い場所である。身を隠すことの難しい特殊空域上で、彼らを敵視しているであろうパムタエ帝国の勢力下にある星に近づくのは危険であったが、容積が小さくて、掘りつくされた鉱山しかないこの星なら大した軍備もないはずだと帝国の皇女自ら太鼓判を押した。確かに軍艦は一隻も停泊していないようだったが、陽折牙の慧眼は小さな星の傍で蠢いている蝿の群れのような影を見逃さず、乗務員に報告した。

「グラスバルト部隊が何でここに…　どこの部族かしら」自分の権威が通じる相手かも不明ではあったが、ミャンレ・フリスロッツ自らがこの船を帝都に届ける途中であり、願わくは食料の補給を、と皇女が通信した。これを聞いて、最初からそうしてれば良かったじゃないか、と他の三人は一様に思ったのだが、実は色々の事実に基づいた風評で帝国内の古株達に好かれていない彼女としてみれば、できる限りこのような手は使いたくなかったのである。

しかし、島ほどの大きさしかない沈星地表にへばりついている基地からであろう、このように通信を返してきた相手の声を聞いたミャンレは我が耳を疑った。『やはりミャンレか…　それを帝都に届けるというのは本当か』

「マルスシカ…　どうしてあなたがここにいらっしゃるの」

カルツ達に会う直前まで、『計画』は全てが順調であったと皇女は感じていたが、新鋭飛空挺や秘められた才覚を持つ友人を得るなど、まさに神の恩寵が彼女の道をいよいよ達成へと導かんとしているという頃合から急に、見えない歯車の軋る音が彼女の耳を悩まし始めていた。三人の仲間達との微妙な関係性もそうだった。そして、帝都で飲んだくれているはずの義弟がなぜか、戦場で、しかも明らかに彼女の道を阻もうとして兵力を率いているのである。

『答えよう、愛しき姉よ。太陽より高い位置にあらせられる父陛下から、あなたの破門を通達するという厄介な命を受けたゆえ、私はここにいるのだ。あなたが秘宝を盗んだことは知れているし、その飛空挺も栄光ある帝国軍の艦艇を幾度も沈めている』

彼女は額に汗を浮かべて手で胸を押さえるようにしながら『何で神様ミーちゃんを苛めるの』と何度も胸の内で繰り返した。

「あ、あなただって…　どうして私だけ…」もともと、くだらないと感じていた宮廷を飛び出し滅ぼすことにしていた彼女ではあったが、こうも早い段階で、しかも彼女に甘かった皇帝が皇女を見限るなどとは予想もしていなかった。ミャンレ・フリスロッツは、海洋帝国時代に幾度か皇帝となり、滅びる前も最高神女を出した血統にある。だが彼女の父親は狂人であり、表立っては申し分ないが、密かにその妻を毒殺、幼い我が娘に乱暴を働いていたことが発覚したことで、宮廷の塔に幽閉され、数年後に病死。彼女を哀れに思い、その気高い血筋を残そうと現皇帝自らが彼女を養女としたのであった。

だが、その後も不幸であった。身上的な立場の弱さを突いた三人の兄弟によって代わる代わる性の玩具とされる日々――その中で、彼女は『ご神託』を受けた。そして、中でも最も愚鈍で兄弟達の影となっているコサルニッチ・マルスシカ・フリスロッツを逆に利用し始めたのである。

　こういった様々なことが走馬灯のように彼女の頭を駆け巡り、周囲のものが異常だと思うほどにミャンレの身体は酷く震えていた。それでも、唯一の救いだった父帝の笑顔を思い出す。――お父様だけは星を墜としたときに救い出し、帝国の馬鹿げた行事や政なんか忘れさせて、どこかで一緒にのんびりと暮らしても良かった。そのときは自分も大人だし、妻として傍に仕えることだって――

『言わずともよいミャンレ。私も罪を犯したことを父陛下に告白したのだから。父陛下はお嘆きになられたが、気丈にも正しいご決断をなされた。すなわち、この私への愛は小さな罪によって拭えるものではない、ゆえに汝は我が過ちをその剣によって拭う試練を果たせ、と』

「過ち？　お父様になんて言ったの！　冗談じゃないわ、アンタ達が、アンタ達のせいでっ…！」分裂的に精神の閉鎖空間に断絶させて抑圧した記憶や想いなどが一気に咽返ってきたので、星の少女は顔の色素を失って涙ぐみ、反論を整然と行うことができなかった。

『ミャンレ、せめて私の手で、恩をあだで返すように皇族の名を汚してきたお前を葬るよ。あらゆる部族の長がそれを承認している。この部隊も施設もラークリキュル族から借りたものだ。その戦艦は必要ない。すでに設計図が帝都に持ち込まれている。一年以内には増産され、地上の愚か者達は全て我が帝国の名の下に平伏することになろう』

「一年…！」サパニ・キィフ・シュイラーダートにとっては、地上勢力にいた立場としての驚きである。

『だが、最後にもう一度聞こう。その船を我らと父陛下のために持ち込もうとしていたのか』

「そ、そうよ、マルスシカ！　あなたからお父様に申し上げて、私の忠誠は変わらないと」

『そうか、さすがは我が賢き義姉ミャンレ・ルクシュト』男の音程が変化し、彼女が今後名乗るべき旧姓を述べた。『…ならば余計に生かしては帰せない。私達、いや、あの兄達のことだからわかるだろうが、私だけが、全ては丸く収まっているのだ。だから、私は一人で来た。戦場など初めてだがな、私もそろそろいい年だ、体験しておくのも悪くなかろう、と父はお許しの笑いとともに仰られたよ。後方から地上の友軍も駆けつけてきてくれている。これで少しは連中の評価も上がるし、姉さんが何を言っても聞こえない、…防音の行き届いた私達の部屋のようにね。一石二鳥だ。逃げ場はない、せめて最後くらいじたばたしてくれるなよ。くくく、最初は大騒ぎしたもんだよなぁ、姉さんも…』

「…ふ、ふふっ…　大人になったのマルスシカ、嬉しいわ」彼女は気がふれたように少し笑ってみたが、意外に冷静な自分に驚いた――私の使命は失敗したようね。でも、神の使命とは低確率に挑む運命の戦士達の犠牲の下に、誰かが打ち立てるもの。あんた達が私の中にぶちまけた汚らしい液体の中にだって、私に子を作らせようとした凄まじい数の精虫どもが在って――死んだ親父のせいでもう絶対無理なのにねぇ、一所懸命よ、あいつらも。生まれは汚らわしいのに、機械みたいに必死なあいつらには妙な愛着を感じたわ。でも、ああやって神にすぐ召される生贄の中から偶然、成功する者がいつか必ず現れる。それは尊いし、その犠牲の活動に従事したあらゆる者の代表であり、愛すべきコなのだわ――

　ミャンレ・フリスロッツは通信を切ると、三人の知り合ったばかりの若者達を見渡した。彼らは、彼女のような子供時代を知らない目をしていた。彼女の運命が神の望む結果を生まないのなら、彼らはそれに何らの関係も持たないし、果てしなく暗い海の底へ一緒に連れて行くこともないと彼女は感じた。

　ゆえに、皇女となった少女は彼らに退艦を薦めた。かなり危険だが、慧栖架に三人で乗って離脱すれば敵を振り切れないこともないし、近くの星に身を潜めてどこかの商船にでも乗り込めばいい、私さえ消せば連中は手を引くでしょうから、と。だが、誰も時折大きな溜息をつくばかりで答えない。

「私が降りればいいと思ってるのね。でもごめんなさい、この船、最後にもらいたいの。もちろん私怨だからくだらないけどさ、アタシ、玉砕したって…」

「…戦いましょう」言葉の途中で、キィフがミャンレの手を握った。「あなたの痛み、全てがわかるわけじゃないけど、私も辛いことあったし…　それに、私の国もそうだったけど、もう少しで恐るべき空からの制圧艦隊が来るというのに、連合所属の国までが星に尻尾を振っているなんて。由々しきことだわ」

「お、おお、そうだよ、俺達、地上のために戦おう。ミャンレが皇女でなくなるなら、利害一致だろ。短い間だけど、一緒に色々やってきたじゃん、かけがえない仲間を見捨てられるかよ。話を聞いてると、どうにも皇族連中なんて糞野郎の集まりじゃないか。金持ちと貴族なんぞ、皇帝なんぞ、ぶっ潰しちゃおうぜ！」

先ほどまで、三人でどうやってあの狭い操縦席に乗ればいいのかと考えていたワナであったが、好いた娘の意見に合わせてすかさず弾んだ声を上げた。『お父様は違うわ』とミャンレは思ったが、話の成り行き上、それは口に出さなかった。そして、無言を続けているカルツを、恐る恐る見やった。

『またアタシのこと嫌いになったんでしょ』と、彼女は他人に聴かれぬように慎重に心術の経路を造りながら彼だけに話しかけた。その目は太陽の輝きを放つ隣の娘とは違い、曇り空のようだと相手の少年は感じていた。困ったときや怒ったときなどの不思議な癖らしいが、彼女の眉間が吊り上るように寄り、眉と目の間の皮膚に奇妙な一本の皺ができている――その表情は愛する現皇帝にも見せたことがなく、彼女自身も意識していなかったが、幼く短い記憶に閉じ込めてある、優しい母に愚図るときの顔であった――ことに気づくほど、彼は穴が開くほど彼女の顔を見つめ返している。このときカルツ・ピルスは生まれて初めて、美点ではなく、異性における小さな欠点を何よりも愛すべき個性として再認識していたのだった。

『な、何だよ、関係ねぇ、俺が好きなのはキィフだ』しかし、彼が天候のうちで一番好きなものは、人にはあまり言えないことながら、どんよりとして気の進まないような曇り空であったから、ミャンレが術で心をまさぐろうとするのを防御術で必死に遮断したのは、そういった動揺を彼女に知られたくないからであった。

「だって、この船はカルちゃんじゃなきゃ動かせないんだもの！」ついにあきらめて、彼女が肉声を発した。独特の皺はさらに深くなり、頬がぷっくりと膨らんでいる。『ったく、子供とかって俺達のことをいいながら、自分が一番子供じゃないか！』と、彼はたまらなく彼女を抱きしめてやりたい衝動を必死に抑えながら、自分も閉鎖的な念話で応答した。そして、口を動かした。「やればいいんだろ、地上の奴も空の奴も、俺の陽折牙に群がる奴はみんな敵だ。蹴散らしてやる！」

「おい、いつからお前のだよ」と笑いながらワナが怒ったふりをしたが、酷く動揺していたカルツは答えずに中央の座席に着いた。「陽折牙、教えてくれ。どっちの敵もやっつけるとしたら、戦術はあるか」

　そういうのって普通は乗組員が考えるんだけど、いつものことだしな…、と思考システムが思ったに違いないと質問者を含めて誰もが感じた。無理難題の前でさすがに世界最高峰の人工知能もしばらく沈黙したが、健気にも真面目に返答してきた。

*『…戦略オプションを立案。本艦単独で地上勢の艦隊を陽動、ご主君と方々は接近戦用乗降兵器で帝国軍を迎撃、内一名は敵基地に潜入、グラスバルトの遠隔制御装置を破壊してください。合流後、全敵部隊を鎮圧します』*

「お前で十三艦も…　いくらなんでも無理だよ！」彼はこの時、『他の誰が死のうと、お前だけは失いたくない』と感じた自分は狂っているのではないかと心配になった。だが、子供達は軍事のプロでもないし、他に方法がなさそうであった。

それでも彼らは不安から矢継ぎ早に考えを口に出し、相談せずにはいられなかった。バラバラに戦うよりも、基地を爆撃すればすぐに終わるだろうという意見。一見して正論であるが、陽折牙もバカではない。この船には投下型の爆雷発射機は無く、側面のバリスタで下方向にも応射するか、乗員が甲板や投下穴から落とす――本来、この船には一般の軍艦に比べてはるかに少ないとはいえ、数十人の乗員が必要なのである――しかないが、重力の利が無い沈星付近で爆弾を落とす、という考えはそもそもナンセンスであるし、基地には当然対飛空挺砲がいくつも設置されていたから、ヴェシュマで取り付くのが、最良とはいわないまでも、採るべき手段といえた。

　そうこうしているうちに後方の敵艦隊がヴェシュマを放ち、かなり近くまで寄せてきたので、四人全員がそれぞれ気に入ったものに乗り、陽折牙を離れた。宝船はまるで優秀な船長にでも操られているかのように、臆することなく、三角の陣形を組んで突き進んでくる船の群れへ加速をつけながら突進していく。

『お前のために、絶対死ねない…！』砂魚の少年は全力で敵に当たることを誓ったが、これほど集中して自分より強いものにぶつかっていこうとしたのは、恐らくこれまた生まれてはじめての体験であっただろう。それを彼自身も感じ、武者震いのようなひきつった笑いを浮かべた。

『水泳ができないから大きくなったらやればいいやと思って体育の授業を休み続け、もう15を過ぎちまった。仕事を任されても、明日片付けようと思ってたら次の日には誰かがやっててきれいになってた。…こんなのって良くないんだよな。良くない。今の僕は、正しさに目覚めたんだ』彼は自分に酔いしれるように、最前線に出た。

「こらっ、俺達がやるから、君は援護してろよ、危ないぞ！」とワナが叫ぶが、カルツは『ゲームじゃ俺に負けてるくせに。見てろ、僕の才能を』と篠向を構え、まだ遠くで空中に浮かんで頭を低くして唸っている犬の群れに、練習のつもりで振りかざした。すると、敵はそれを合図としたようにガチャガチャと音を立ててまっしぐらに突撃してきた。思わず後ずさってよろめくカルツ機の横に慧栖架が飛んで来て、耳元に囁くようにした。

「カルツさんは基地へ向かって、私達がひきつけるから。重要な仕事よ」よっしゃ！と早速上に見える星へと走ろうとするカルツを、ミャンレ機の巨大な翼が制した。

「バカ、今じゃたこ殴りされるでしょ、乱戦になったら隙を突くの！　敵の指揮官は愚者のくせに見栄っ張りよ、必ず勝てる戦と思って一人で来てる。基地に入っちゃえば誰でもやれるわ」

「ああそう、君のご兄弟だもんねぇ！」

　砂魚の少年と星の娘が互いにコイツムカツクーと思う暇もなく、34機ものグラスバルトがたったの四機をあっという間に囲んで襲ってきた。それだけでなく、基地の周りにある小屋のようなところから増援も湧き出している。その無機質的な動きはワナ・クヴァイに、いつか見た味方の無人機が敵を貪った光景を思い出させた。「しょうもなやしょうもない：南国方言では『実にくだらない』という意味だが、中央大陸に伝播してニュアンスが少し柔らかくなったようだ…」少しでも緊張を緩めようとワナが呟いたが、誰しも確かにそうだ、と納得しただけである。

「グラスバルトの重変音波が来たら機体を脱力させて！　慌てなければ雑魚は雑魚よ！」

だが、今やその名で呼ぶのは正当でないと本人に怒られるかもしれないが、こちらにはヴェシュマを駆らせたら現在世界一であろう『死神の乙女』がいるのである。囲まれても何度もの一機で切り抜けてきた経験を活かし、彼女は仲間達を中心に円をかくように飛び、四方八方に斬撃を放った。これにより、透明な気水晶によって内部構造が透けて見える髭面の動物型機鬼どもは一挙に食らいつくことができなくなる。ワナ機と自力で動いているヴィルベルシャテンが接近してきた犬を相手し、遠くの敵は青いマグネーティッシュヴェレが雷撃を口から発射して狙撃していった。この機体は二人の兄に喰縞が支給された時にお下がりとして皇女が譲り受けたもので、彼女自身はそれほど気に入ってはいないものの、両翼に『』を装備するなどいくつかの改修点があり、その攻撃力は侮れない。だが、痛みを知らない無人機達は、斬っても撃っても執拗に起き上がって飛び掛ってくる。

「…今だ、カルちゃん行け、このままだとこっちが力尽きる。頼むぞ！」「わかってら。それより、君の命に代えてもちゃんとキィフさんを護れよ！」「何よ、アタシは?!」

などとヴェシュマの拡声器によって子供達の声が空に響いたと同時に、カルツは何匹かを文字通り蹴り飛ばして小さな島ほどしかない星へと降下し始めた。だが、近づくほどに引っ張られる感覚が弱まり、足で走る力が増す。全く矛盾した感覚に戸惑ってもたついているうちに、案の定地上からの梵子砲と犬の追撃にさらされてしまう。

「ああ、何やってるんだよアイツ！　五号機、カルツを助けてやってくれ！」とワナが叫ぶが、混乱しているカルツ自身から指令がないので機械は無情な様子で応じず、ワナ機を襲おうとした機械狛犬の首を篠向で切り捨てた。

　カルツ・ピルスは前に級友が三機のヴェシュマからリンチ同然の攻撃を受けたとき、自分はぼんやり見ていたことを思い返した。『ちくしょう、因果応報ってやつスか』彼は犬に噛み付かれたり組しかれたりしながらも、ようやく動かし方がわかってきていた。「…だったら、俺も逃げるまでだ！」

体の上にまたがって首を噛みくだこうとしている犬の股間を蹴りつけて離れ、飛び掛ってきたもう一匹を掴むと自分を狙ってきた梵子砲のエナギー弾に投げつけた。そして、カルツ搭乗機は空中を泳ぐように走り出した。

「こりゃいける」彼も予測しないほどに加速度がぐんぐんついていき、敵を振り切ったのは良いが、「うわわわっ！」酷い物音と土煙を上げて、建物と地面の間に機体をぶつけてしまう。だが、その衝撃で正面口が破れていたことに気づくと、「よし、作戦通り」と叫び、何ら疑うことも無く中に入っていった。

*『…ご主君、基地内に大きな敵影１つ発見、…解析します』*

「こっちのことはもういい、お前は目の前の敵に集中しろ！」彼はこじんまりとした外見からは想像もできないような地下部の迷路を思いつく方向へどんどん走りながら、独り言のような会話のような、不思議な感覚で叫んだ。彼を自信過剰にさせるために配置されていたように、対人間であればかなりの脅威であろう守護機鬼達が多数出現し、カルツの不器用な蹴りや剣の一振りだけでたちどころに排除されていった。基地内には地上のような重力があり、狭くてかなり動きづらかったが、障害にもならぬと彼は感じていた。

*『…エッセンシュトライヒェンです。皇族専用機と思われます。警戒してくだ…』*と、機械があろうことか有機的に判断を覆した。*『ご主君、即時退避ください。繰り返します、即時退避を…』*

　まるで動揺したような陽折牙の声がカルツ・ピルスの胸を震わせたのは、もはや彼自身その位置がどこかもわからなかったが、天井が高くてだだっ広い円形の部屋に出たときだった。彼が部屋の真ん中に来たところで四方向の出口全てにおいてシャッターがすばやく下り、上空から大きな影が落ちてきてやはり大きな何かを振り下ろした。当たれば一撃で真っ二つになっていたであろうが、少年が陽折牙の声に驚いて体制を崩していたことが幸いし、間一髪それを避けた。

「ミャンレか？　いや、お付のお子さんかな。君もあの娘に犯された口かね…？」

『うるせぇ不細工』と、彼は自分の顔の質も皇子の顔を見たことが無いことも棚に上げて、恐怖感を噛み殺すように呟いた。だが、エッセンシュトライヒェンの蒼い躯体は、慧栖架とも違い、まるで英雄か神の御使いような姿で、格好は良かった。ゆえにこそ、この場合は少年に非常な邪悪さを感じさせている。

『だめだ。こいつにはワナでも勝てない』彼は直感し、周囲の様子を確認しながらじりじりと後退した。敵は光輝く加環を胸のところまで体に填めていた。第三皇子が先ほど用いた長い篠向を脇に放ると同時に、加環が一人でに体から外れ、宙にふわふわと浮かび上がった。

「これはただのエッセンシュトライヒェンではありません。私のような素人でも操れるよう、超超高度な人工知能が埋め込まれている」足の長い喰縞が腕を上げ、漂う武器を掴んだ。「陽折牙の設計図をさらに改良し、有機的干渉の全てを排除した。常に一つの正しい答えだけが最速で弾き出される…」相手が話に夢中になり始めていたようだったので、状況的に時間を稼ぐわけにはいかないものの、打開策を見出すためにカルツは黙っていた。

「…いずれ我々の知恵は、こういった駆動する乗降兵器すらお払い箱にしてしまい、夢の兵器である一本の新型麓楠だけで全てを解決するようになるであろう。かつて、海で成しえなかった、地にへばりつく蛆や苔どもを昼夜を問わず指導する燦然たる天界の我々が…」ここで、皇族専用機が上を見上げた。この戦いを記録しているカメラが機能しているか確認したのである。

「さすればスイッチ一つで、都市、いや、国、世界全体をすら、罪滅ぼしの反省をさせるために数千年も復興できない焦土に変えたり、海と同じにしたりできる。いわゆる聖戦――間違いは天の矯正によって削除されるのだ」彼はうっとりして、宦官に書かせた虎の巻を棒読みしつつ自分の声を録音機器に収めていったが、この長ったらしい演説を聴かされていたほうは、『バーカ。よほどのアホじゃないと考えもつかないようなことだ。そんなの戦でも何でもねぇ、クソ世界の糞尿垂れ流し理論だ。俺なら即座にそんな臭い世界飛び出して他の次元を目指すね』と思っただけである。そして、さらに下がったが、ゴン、と背中を壁にぶつけてしまった。

その音で皇子のヴェシュマがカルツを向き、両手で武器を構えた。「偉大なる天神の血を引く皇帝閣下に楯突く愚者へ、天の救済を」

『どこの坊主も同じこと言いやがる』と彼は初めて声に出して応じようとしたが、敵が凄まじい勢いで武具を振るってきたので慌てて飛び退った。即死は辛うじて免れたが、左腕が肘から千切れて、篠向を振るえなくなってしまった。

『陽折牙…　逃げろ。どっかで幸せに生きてくれ』目の前に差し迫った死の影に怯えるどころか、この少年はもはやあれほどこだわっていた自我の問題を全て捨て去り、『どこの坊主も』喉から手が出るほど欲しがるような無我の境地に、あっさりと達しているようだった。

『何となく思うんだ。お前だけは、もし俺が生きてたら本当の友達になってくれたんじゃないかって』

　他方空域では、ガシャガシャッ、と彼の宝船が全ての砲座をセットして突如雲から浮上し始めた。陽折牙は敵の全てと戦うために、プログラムはされていなかったが前回の戦闘で静かに学習していた雲中のゲリラ戦の方法を選択し、弾を温存しながら尻に一発ずつ当てるようにして敵を苛立たせていたのに、今やその有効な戦法をかなぐり捨て、無謀な突貫体制に躊躇なく入ったのである。

*『三秒以内に敵艦隊を全鎮圧、即時七秒以内に敵乗降兵器を上空より主砲にて狙撃…』*このような沈星語の文字が誰もいない管制室の表示板に出ていた。敵基地は古いものであり、運よくその頭脳に地図が入っていたのであったが、それでも当然ながら作戦成功率のところは数字すら出せず、『null』とバグ表示が出ている。しかしこの機械は狂ったように自らの正しい判断に逆らい、敵艦隊とヴェシュマの一斉放火の中をのた打ち回った。

　――カルツ・ピルスは最後の意地とばかりに武器を投射したが、蒼い機体は操縦者の指示も必要なく軽く回避してしまった。それがシャッターの一つに当たり、小さな穴を開ける。

『え、何だこれ、簡単に破れるのか』もし乗っているのがマルスシカでなければカルツはとっくに無残な屍をさらしていたであろうが、敵の動きが高度な人工知能の制御を受けても悪いために――もしかしたら、むしろ彼が足を引っ張ってくれていた可能性すらある――何とか連撃をかわし、穴の開いた扉に体当たりして転がり込み、通路を一目散に走り出した。

「こらこら、無駄だよ逃げても。まぁ、この方が映りが良いかな」弱いもの苛めが酒と女の次に大好きな第三皇子は上空に合図して記録用の機鬼を呼び、ゆっくりと追いかけた。

　カルツは行き止まりの部屋にたどり着いてシャッターを閉めると、中を探した。すぐに戸が開けられてしまったが、その左手には中に転がっていた加環が握られていた。

「それは充填がうまくいかなくてそこに放置していた不良品。しかも子供にはわからないだろうけど、そういうのは両手で扱うんですよ」

　だが敵の声は、死の興奮で脳内を様々な非常用の分泌物で満たしていたカルツ・ピルスには聞こえない。彼はぶつぶつと奇妙なことを呟いていた。

「左右から来る確率34％、前方から打ち下ろす確率63.6％、回避中に筋力を機能不全部に注入…」

「よく録っといてくださいよ！」エッセンシュトライヒェンが雷撃の力を蓄えて光っている武器で彼を真正面から分断しようとした。だが、カルツは敵が動くより早く左側へ飛んでいた。そして、右腕を前から左後へ振って腰を捻り、反動を使って一気に敵の腰部を叩いた。

「そんなもので斬れるかい！」とマルスシカが叫んだのと同時に、皇子の機体は下半身から上半身が剥がれて少し宙を飛び、すぐにどちゃりと落下した。慌てて彼は腹部の操縦席蓋を開け、両手を上げる。

「な、何の素梵子力ですか、それは！」彼はかなり額の秀でた小太りの少年だった。

「…知るか」ヴィルベルシャテンが一本棘の突き出た爪先を振り上げて皇族専用機の胎を軽く蹴ったので、砂魚の少年以外の発言者はこの部屋にいなくなってしまった。

「お前が死なないとミャンレが新しい一歩を云々…って言ったほうが決まったかな。

…にしても、俺、筋力とか口走ったか？　我ながら意味ないことを。アホくさ。バカ皇子のことだ、この武器は不具どころかどうせすでに凄い素梵子力が注入されてたんだろ、だから二重に入んなかったんだ」

そういって手のもので空を切ってみた。すると、それは音もなく砂のようになって崩れていき、彼のヴィルベルシャテンは驚いたように我が手に残った瓦礫を見つめたが、気味が悪くて払い落とした。「…注入された丸剣って壊れないんじゃなかったっけ…　ま、まぁ良いさ。生きてるんだから」

このように、彼は自分のしたことを忘れてしまったが、どうにもこの少年、瑣末なことにはくよくよするくせに大きなことについてはあっさりと片付けてしまう悪い癖があるようだ。確かに彼の『筋力』などは、本人も自覚するように、不良品の異常な切れ味――敵の装甲の硬さを問わず、最高位の時空術でしかできないような所業として、構成分子そのものの実在を否定しながら異次元に吹き飛ばした力とは全く関係ない話である。

しかし、彼がありえない力をそれでもどこか空虚なところから機械的に、何らかの特殊極まるデバイスを通して引き出そうとしたことはその無意味な形容からも明らかであった。ありえない力なのだから名づけようもないが、それでも無理やり素梵子的に言うなら後世で『無の虚神』などと呼ばれて光と闇の後釜の玉座に座らされた方面にその答えを求めるしかなかろう――この少年にそんな大それたことができた理由はともかく、彼の特質のために誰もこの大事に関心を抱けないのは甚だ惜しいことなので、蛇足ながら――

　さて、砂魚の少年はしばらく安堵の実感に胸を熱くさせていたが、不意にあることに気づいて走り出した。が、どこをどう行ったら出口へたどり着けるのかもわからない。彼は皇子を殺したことを今更ながらに後悔した。

「陽折牙、僕は大丈夫だ。今から機械中枢を壊す。…つーても、どこにあるかわかんないけど…　いや、何とかする。すぐ助けに行くから！」

*『…制御装置位置情報検索…　実際の目視による危険・経路確認を願います。…二つの三叉路直進、次に右折です』*

「おいっ、それよりそっちの戦況は！」

*『…ご主君の無事を確認。本艦はです。自動ナビゲーションモード起動。本艦は戦闘中にてこれより通信を遮断します』*

新鋭艦は何かを避けるように、いつもと違って質問に答えようとしなかった。「…ひ…　陽折…　牙…」カルツは胸騒ぎに襲われて必死に走り、物に躓いて転び、すぐに起き上がった。彼は人工重力を否死霊体生物、いわゆるアンデットのことだが、特にゾンビのようなものを指し、『不気味で鈍感』なことを『否死めく』などと形容するの無数の腕がまとわりついてくるように感じた。

*『次に、すぐ左折、目標地点です。退去経路は目標地点から右折、６根度直進後、昇降機を使用してください。自動ナビゲーションモード解除』*

　彼は不安をぶつけるように絶叫して部屋中の機械を無差別的に殴り、蹴り、物を掴んでは投げつけて徹底的に破壊した。そして、上空で四本足のヴェシュマが混乱して立ち尽くしたり、ただの獣に還って同士討ちを始めている間を飛んでいく。三人と一体は一息ついて空に浮かんでいたが、腕のない痛々しい機体をみて彼を労わり、称えようと近づいてきた。しかし少年は彼らを跳ね飛ばさんばかりの勢いで叫んだ。

「陽折牙が危ないんだ、早く！　くそっ、もう間に合わないかもしれない…！」

　足の速い慧栖架を先頭に四人は走りに走った。だが、陽折牙は『ご主君と方々』から敵を遠ざけるためにかなり離れた方へ流れていた。そして、どれほど経験豊かな提督にも成しえないような手腕で、すでに五隻もの敵艦を独りで轟沈させた新鋭軍艦も、ついに距離を詰められてガレー船に接弦されかかった。

この人工機械には本当に自我が芽生えつつあったのだろうか。それを信じることは普通人にとって科学的に覆された地動説をそうする以上に難しいことではあるが、陽折牙は、他の人間に蹂躙されて身を汚すくらいなら沈んだほうがましだといわんばかりに身をよじって橋や縄を断ち切り、無防備にも心臓部が埋まっている船尾を敵の砲台に差し向けた。

　そして、駆けつけたカルツたちの目の前で、たくさんの砲座が火を噴いたのだった。

「…敵の船がまた増えた…？　いや、でも」その音を聞いて膝を落とすように立ち尽くした砂魚の少年の感想は、宝船の思考システムのそれとほとんど一致していた。

*『本艦3-7-1方向より多数砲撃を確認、ムルシヒ・ワパパ艦艇四隻に命中…』*船の体内では画面が遠方を映し、新たに現れた40隻以上の大海牛艦隊を未確認勢力として認識していた。しかし、陽折牙が悩む間もなく、『四隻』の認知数はたちどころに数を増していく。その砲撃は新鋭飛空挺のそれのように強靭な射出機による火矢でもなく、低出力の梵子砲であったが、それは旗艦と数隻の改造ゴッグ船が撃っているようだった。あとは全てかで、ヴェシュマは全く出ていない。

　ムルシヒ・ワパパの艦隊は方向を転換して、突然襲ってきた方に向き直ってヴェシュマ全てを突進させた。もはや新鋭飛空挺とはいえ一隻など構わない、という判断であったが、天才的な操艦を肌で感じていた彼らとしては、これは全く失策というより他はなかった。陽折牙は苦しい中でもじっと、敵の隙をうかがっていたのである。

*『主砲・発射』*

　静かに短い文字だけが表示板に浮かぶ。不用意にも横一列に並んでしまった敵艦を、素早く90度転回した陽折牙の渦巻く光柱が一度に射抜いた。近くの三隻はそのまま残った瓦礫を漂わせるだけとなり、他の船もかなりの損傷を受けたようだった。

*『…貴艦等の戦闘能力は半減しました。因って、投降を推奨します』*

「手ひどくやられたなぁ！」それでも、嬉しそうにカルツの機体が甲板に着地する。だが、新鋭艦は戦闘体制を解かない。もし、味方と仮定して作戦行動中の新参勢力が敵であれば、もう今度こそ打つ手がないのである。

四人と一体と一隻が戦況を見守る中、ヴェシュマとボロ船だけになってしまったムルシヒ・ワパパ軍は逃走を開始した。大艦隊は悠々とそれを相手にせずに素通りし、無線ではなく、旗艦と思しき巨大な古いキャラック型の船首に立つ一体のヴェシュマが声を拡げた。『あれもエッセンシュトライヒェンだ』と、珍しいものを日に二度見ると不幸になるという迷信を思い出し、砂魚の少年は目を閉じてお呪いの言葉を口にした。

『こちらサディンカプル王国国境防衛軍。当方には貴官等を友軍として迎える用意がある』

「なんでよりにもよってサディンカプルよ…！　アルシュマイナーの声だわ」

「え、『黒い巨人』って言われてる…」その綽名のほうがいいなぁ、とキィフは思いながらミャンレのマグネーティッシェヴェレに近づいた。「でも、貴方達寄りでしょ、どちらかというと」

「そうね、地上勢力で一番仲が良いくらいだったわ」元皇女は苦々しく答えた。

「てことは、俺達を星の手先にしようってことかい。こりゃ、場合によっちゃさっきの決意表明をひっくり返さないといけないねぇ」まぁキィフと一緒にいられればどっちでもいいけど、とワナが小さく付け足す。

「違うわよ、もう。後ろを見て」ミャンレ・フリスロッツの青い機体が長い首を傾けた。「連中、後ろの犬も平らげてるわ」その通りであり、先ほどヴェシュマたちが乱戦を展開していた空域にも同じ部類の船が過剰なほどに集まっていた。

「どうする」疲れてるだろうから陽折牙に聞くのはよそうと考え、すでに機械を降りて一息ついていたカルツ・ピルスが友人達の機体を見上げた。

「あなたねぇ、敵かもしれないんだよ」といいつつ、慣れない戦闘で疲れた星の少女も機体を母船の中に容れた。「でも、お腹もぺこぺこ」

「んだんだ。ついてくべ」と中央大陸の田舎弁丸出しで、ワナが慧栖架の手を取って導きながら機体を留めた。

# ５、低き虹

星側の軍勢に皇子の死が知れる前に退くため、全ての戦艦が密集隊形で国を目指した。子供達が惚れ惚れするような大艦隊も、帝国の新型海牛船や虚品装備を施されたヴェシュマ隊の前では萎縮せざるを得ないのであった。途中、サディンカプル軍の旗艦バーパブル号は陽折牙と連結し、乗員同士挨拶を交わした。『黒い巨人』の異名を取る虫者のアルシュマイナー・ローテハインツは確かに背が高かったが、巨人というよりもほとんど貴公子というような容姿の男性で、南国出身の割には肌も言うほど黒くもなかった。

それもそのはず、世界情勢に詳しいミャンレが訝しそうにしているワナに教えたことには、彼は東北の台地帯で遺跡発掘を手がけていたということであった。そこでヴェシュマの武器になりそうな品物を多く見つけたことにより一代で大富豪となり、故郷に軍事協力を申し出て、いつしかその中核に座ったのである。彼の名は漆黒に塗装された専用機から付いたが、このような特殊な機体が地上勢の手に入ったのは、彼が金に物言わせたというよりも、この王国の採っていた外交戦術によるものである。

後世にてイーマス王朝に取って代わられるサディンカプル王家は、一帯で争っていた多数の虫者や指者部族などを掌握し、それ以外の非共存的生物を住みやすい平野や森林から追いやって歴史上初めて熱帯雨林のゼレファス地方に大規模な国を作っていた。当時、あまり仲の良くない飛竜者と瘤取者中心のアルタクシャス帝国がゼレファスを支配していたから、ビヒルエイス共和国とともに、その支配地内に新しい大国が登場したことになる。領内の治安維持を図るために初期は帝国もサディンカプルの台頭を支援していた。

だが、この王国は様々な対立や和睦を乗り越えた結果、それまでほとんど見られなかった、指者と虫者という共知種族同士の調和がうまく図られ始めていたので、互いに補い合って様々な技術革新を行い、農業のやりにくいこの地に多くの作物を実らせ、新しい民主的な法律を取り入れて発展し始めた。

これを脅威と感じた地上の帝国は、サディンカプルが西の隣国とは違い、『死の焔』に対抗するようにして生まれた新興の『核火神教』を国教とすることを利用して二国を緊張させる。こうして地上でごちゃごちゃと争いあっているところへ、静かに星が沈み始めたのであった。仕方なく内戦寸前で火種を冷やし、反沈星軍事支配連合を唱えて世界の先進国を気取ったアルタクシャス帝国であるが、ビヒルエイスは独自の判断で各地の教団組織を使って他国と干渉するし、独立機運の高まるサディンカプルは星の部族と交易を密にして帝都とも貢物を交換する有様で、アルタクシャスの威光はほとんど地に落ち、これまでの各国の動きに見られるように、芋蔓式に連合の機能も低下していた。

「そのサディンかんとかちゃんが何で星を撃ったわけ？」バーパブル号の食堂内、口にスプーンをくわえて満足そうな表情で、ワナがテーブルに頬杖をついている。目の前の皿には何度も保存用粥のような決して褒められたものではない食事が盛られたが、彼は猛然と干して、話し続ける少女をうんざりさせた。

「さぁね。でも、いよいよ本性をむき出したってことだけは確かだわ」

　しっ、と雪聖が唇に指を当てた。艦長であり、提督である男が入ってきたのである。

「皆さん、随分良く食べるなぁ。いや、何も保存食をケチってるわけじゃないですよ、まぁ、ウチの船員達にも食べさせなくちゃならないしなぁ、ははは」彼なりのジョークらしいが、子供達は申し訳なく思って下を向いてしまった。彼は慌てて、その整った顔の前で二本の右手を振った。

「あいや、その、降りたときに歓迎のご馳走が盛りだくさんにあるんですよ。それなりにお腹をすかせておいてもらわないと」

　ぱっと表情を明るくさせた四人だったが、ワナは少し口を尖らせて「えー、でも、もしかしてそのパーティーって変な儀式とかないですよね」と言った。その級友は『またまた飽きもせず失言か、この男は』と、顔色を変えてそっぽを向いているキィフを横目で見た。すぐさま飛竜者の少年は横腹にミャンレの肘を受けて「痛て」とうめく。幸い、目の前の大人はその意味がよくわからなかったらしかった。

　ところでアルシュマイナー・ローテンハイツはキィフの前に座っており、カルツはそれについては何も感じなかったが、彼が話すときにやたらと彼女のことをちらちら見ていること、その目線を感じて雪聖の美しい乙女がぱちくりとしたり顔を赤らめて斜め下を見たりしていること、それをワナ・クヴァイが目を鋭くさせて見ていることなどを観察した。

『あ、そうかぁ。お前の気持ちがわからなくて俺は友達失格だ』と彼は感じた。食事の遅いミャンレに合わせて弱いアルコールが全員に振舞われ、ローテハインツ提督は様々のことを楽しげに、優しげに話した。その印象は『黒い巨人』とも軍人とも思えないような、奇妙な、ちょっとふにゃふにゃした感じだった――と、少なくともワナ少年は思った。

　彼によれば、サディンカプル王国軍は連合のために、独自で星者と交易して培ってきた空域戦闘用の軍事力を持って、停滞しつつある抵抗機運を盛り上げるべく、世界最優秀の戦艦といっても決して過言ではない陽折牙を味方につけるよう王から指令を受けたということであった。貴艦の航路はゼレファスからかなり遠い中央大陸上空であったが、危険を冒してでも来て良かった、あなた達の助けになることができたのだから――と、彼はキィフだけを見て言った。四人とも、ただただ相槌を打ちながら、それぞれに色々頭を動かした。

『ま、そういいつつ、敵対してるビヒルエイスがもらい損ねた船を自国の味方につけて、軍事的に先行したかったんでしょ』とカルツが下唇を突き出して溜息を鼻にかける。

『ていうか何、アタシが動かなくても戦線は胎動し始めてたってこと』と、面白くなさそうにして額に手をやるミャンレ。

『エロ親父が、何俺のキィフをじろじろ見てやがる。フォーク手に刺したろか』と考えているのはもちろんワナであったが、カッコイイ大人にどぎまぎしているように見える雪娘はというと、『…なんだろ、私、やっぱり死神とか思われてるんじゃないかしら』と、全く見当はずれのことを考えていた。

　その『死の焔』の元神女であるが、彼女が甲板で促されて恐々自己紹介したときは、さすがに同一の神を相反する教義で信仰するサディンカプルの兵士達はどよめいたものだった。だが、艦長は顔色を変えず、「美しく赤い溶岩のような大海を空に移した戦士ともあろうものが、うろたえるでようなことではない」と、ヴェシュマでやったときのような大声で制した。

「まさしく天女のごときあなたよ、なぜゆえ今母国を離れて我々の有難い出会いを演出してくだすったのでしょうか。いえ、これは失敬、すでに私の手のものが事情の恐らくかなり詳しい部分を諜報してきてくれています。あなたはもはや死神の娘ではない…　そうですね。いや、元来それとは全く異なり、我等が神の教えの元にある高貴な生まれでありながら、あの憎むべき地上の恥さらしによって…　しかし、これは言いますまい、今は」キィフが左手で右腕を押さえるようにして俯いたので、彼は急に話しを変えた。

「あなたは、我らの同胞として数々の下りくる敵を退け、我らの地を護ってくださった。もしお心の整理がつきましたなら、どうか私達の教会を訪れてください。そして、あなたのような実力のある方が、癒しの泉を暖かく整えてくださる父なる神の教えを伝える尊き仕事に就いていただけたなら、我が国民性の発展にとって、これほど有意義なことはありません」

　サパニ・キィフ・シュイラーダートは大いに恐縮して自分の灼熱術に当てられたように顔を真っ赤にし、いつか必ず、とだけ答えて仲間達の後ろに下がった。私は地上のために彼らを見出し、戦ってきたのですわ、と嘯くミャンレ・フリスロッツも、もはやなかなか捨て置けない戦力を秘めつつある他の少年二人も同様で大仰に称えられたが、やはりキィフに対する彼の心の遣い方は尋常ではないと、こういったことには疎いカルツにも感じられていた。

「なぁなぁ、どう思う？」寝るために母艦で女子と男子に分かれた後、ワナはしつこく級友にしり上がりの発音で質問した。もちろんアルシュマイナーのことであるが、これといって落ち度のない彼に対し、真っ向から陰口を言うのはさすがに気が引けていたのである。

「そだなぁ、かっこいいねぇ、金持ちだし強そうだ。キィフさんも惚れたんじゃないかね」彼は気がなさそうに天井を見上げながら呟いた。

飲んでいた水を気管に痞えさせ、翼をばたばたさせてワナ・クヴァイは苦しんだ。「な、な、何！　君、もうキィフさんのことはどうでもいいのかよ？」

「え」と、思わず砂魚の少年はベッドから上半身を起こした。

「え、じゃないぜ。知ってんだぞ、君だって彼女のことが好きなんだろ」図星を突かれてしまい、カルツ・ピルスも顔を真っ赤にして苦しそうな顔になり、何もいえなくなった。

「…何だ本当かよ。ふーん、まぁいいさ。それならそれで」とワナは狼狽したように床を見て少し沈黙したが、表情を明るくして級友の顔を覗き込んだ。

「俺達共同戦線張るっていったよな、確か」

「あ、ああ、うん」

「んじゃさ、ライバルかもしんないけどな、当面は協力してアイツと戦おうぜ」こう言ってワナはカルツの手を取った。砂魚の少年はそういった緊密な関係になれていないので、ちょっと気持ちが悪いと思って、それとなく手を引き、仕様がなく承諾した。

「お、おお、いいぜ、そりゃいい。いい人そうにしてるけど、きっとああいうのが一番スケベなんだ。任せておけないよ」

それから、四人の少年少女が体験したことのない南国の生活がしばらく続くこととなった。その理由となったのもやはりサパニ・キィフ・シュイラーダートの存在である。二日後、少々予想より遅いくらいではあったが、帝都の指示によって南西の沈星軍がゼレファス地方の爆撃を開始した。参加した部族はラクルマンニスとラークリキュル、モクハースといった少数派、およびテグジ族からも少し出ていたようである。

ところが、ここでも少年達が降り立った王国は癒着的外交手腕をすでに潜り込ませていたから、彼らは適当に撃ちあっただけで『奪取された新鋭飛空挺の戦力は予定外、被害甚大』などと本部に打電しつつさっさと退いてしまった。陽折牙は主砲を撃つ機会すら与えられなかったが、この時にむしろ予め陰謀的に定めていた報告の内容とは別に、嘘から出た真といった感じで敵部隊を恐怖の底に叩き落したのが、『死神の…』いやもとい、火神を信仰する雪聖の女操縦士である。慧栖架はいつも通りに並外れた速度で、ゆっくり進む味方を後方に置いてしまい、派手に壊しあいながらも互いに実質被害を少なくする予定としていた味方の宮廷官達を慌てさせた。

そのため、星の部族連合艦隊の虚偽報告は真実味を与えられてしまったわけだが、いずれにせよ、彼らがパムタエ帝国全体の利益よりも自分達の兵力温存と地上からの物資調達、そして隙あらば帝都そのものを狙っていることは火を見るより明らかなことであった。無論地上側とて同じこと、抵抗戦線などと言いながらサディンカプル王国の底意は下克上でしかなかったし、『軽業王』フエンラフは、この茶番にも等しく造られた勝利劇を皮切りに、盟主国を差し置いて、連合所属国だけでなく全ての共知種族とその国家に対して徹底抗戦を呼びかけた。

このような中、政治家達にとっては少々良すぎる働きをしでかしたキィフのことが、むしろ彼らの目に留まったようである。約１ヶ月前、首都ナホラにある火神教大聖堂で、多くの信者を目の前にご神体の骸骨剣士が溶岩の涙を流しながら顎の骨をカクカク言わせて、『降臨すべし、流星のごとき我が右腕』とご神託を告げる奇跡が起きていたこともあり、彼らは彼女の神霊力を然るべき儀式術数人の術者が時間を掛けて力を合わせ、一人では達成できないような術を行使することによって査定してみた。その結果、いくら体内属性反転儀式を受けた身とはいえ、水の神より生み出された祖先の血を引くはずのこの少女が、神気ともいうべき凄まじい炎の素梵子力を体内で沸々と生産していることが判明したのだった。

サパニ・キィフ・シュイラーダートは『使徒』としてあれよという間に上座に置かれ、彼女に色目を使っていた虫の貴族も、『自分の目に狂いはなかった』とのたまうことだけは忘れずに跪き、提督の座を譲ろうと躍起になった。だが、彼女にはあまりにも唐突なことだったし、その資格が自分にあると考えることがどうしてもできなかったので頑として辞退し、とにかく受け入れてくれるというこの宗派に改宗して高位司祭の地位を引き受け、サディンカプル軍の力になることで地上解放のために尽力することだけは妥協点として約束した。

補給を受けたら直ちに飛び立つ予定であったミャンレ・フリスロッツも、二人の少年が連鎖的に陽折牙を地上軍に結びつけてしまったために、再びキィフを憎らしく思いながらも、場に合わせるために言ったにすぎなかった自分の発言に責任を持つ格好となってしまった。とはいえ彼女も、今すぐに味方の軍もなく帝都に向かったところで敵の猛追を逃れることはできないということはわかっていたのだから、これはやむをえないことだったのである。

それに最近のミャンレは、自分があれほど心を鬼にして達成しようとしていた黒雲のような使命感を鈍らせ始めていたことを否めなかった。彼女はそれに気づくと身震いして帝都までの経路を考えたり、小さく愛らしい陰謀を張り巡らしたりしようと考えたが、そうやって集中するといつも決まってある少年のことが思い浮かんで、心が乱れるのであった。

「ミーちゃんはバカな奴と知り合ったからバカなことしか思いつかなくなったわ」彼女はようやく手に入れた一人部屋のベットで仰向けに天井を眺めながら神様に報告した。いつも何かに抱きついて横向きに寝ていたミャンレとしては、非常に珍しい寝姿である。

「あのバカたれ。バカなんだもんなぁ、ほんと。大っ嫌い」思いつくままに悪態をつきながら、キィフが可愛そうに思うほど陽折牙の中で魘されていた――それは、神経を張り詰めさせて男と寝る以外の夜はほとんど毎日であった――星の少女は、いつしかすやすやと安らかに寝てしまうのだった。この様子を見る限り、彼女が本当に言葉通りに苛立っていたのかどうか、疑ってみずにいられまい。そう、本当に歯軋りしていたのは目には見えぬ別のモノであっただろうし、その『計画』は未だ密やかに水面下で蠢いていた――

　この、『バカバカ』の連呼は、実際の少年の前でも披露されて大いに彼の神経をさかなでた。カルツ・ピルスは級友に誘われるままに、気が進まないまでも浜辺に出かけては遅くまでパラソルの下に寝転がっていた。彼はいつか熱く思ったようには苦手な泳ぎに挑戦せず、しきりと海中に誘うワナには、ここに来ただけでも大きな譲歩だ、といわんばかりに興味なく手を振って断った。ワナ・クヴァイは本当はキィフを連れて一緒に泳ぎたいのだが、教会の仕事を覚えるために忙しい彼女を誘えず、その埋め合わせを友人にさせていたのである。彼は入念に自慢の翼に飛竜者用撥水液を塗って、青春の雄たけびを上げながら何度も波の中に飛び込んだ。

「あなたねぇ、何で本なわけ、ビーチでさ。バカじゃないの」

ったく来やがったな、と砂魚の少年は思って胸の上に伏せ置いていた本を脇に避け、面倒くさそうにミャンレ・フリスロッツを見上げた。が、彼女の少々不釣合いなほどに派手な水着姿を一瞬食い入るように見つめてしまう。

「あー、どこ見てんだか。根暗のスケベって嫌ぁねぇ。ご友人は立派、スポーツマンじゃない。砂魚って本当に泳げないのね。海で服着てるのもなんかオヤジっぽいし。それに本なんか読んで小説家にでもなるつもり、ろくでなし。エロ劇画でしょ、どうせ」

「あ、やめろって」

ミャンレは本を拾い上げ、ぱらぱらとめくった。「何これ、わけわかんない。んー、…　…」不思議なものを見たような顔をして、彼女はたまたま開いた中くらいの辺りに目を走らせた。「か、返せ！　別に面白くなくたっていい」それに砂魚種族が泳げないんじゃなくて俺が運動下手なだけだ、と言いかけたが、これは彼女に『口撃』のネタを与えるだけだと気づいてやめ、本をひったくった。

「嫌ぁよ、ちょっと！　何、人が読んでるのにさ、バカ、大っ嫌い！」

まるで殺し文句のように、二言目には『大っ嫌い』でケリがつくと思ってやがる、と彼は鋭く溜息をついた。最初はいちいち腹を立て、女の子か皇女だか知らないが、だからって調子に乗るなとばかりに一度ならず怒鳴りつけたこともあるが、一向に直らないどころか日々酷くなっていくので彼も段々慣れないことに慣れてきてしまったようだった。それに、カルツは本を持ってきて読もうとするのだが、周囲の楽しげな声や騒ぎのせいでいつもの妄想癖が活発になって集中できなかったので、ミャンレのせいで読めなかった、などとは到底言える立場ではなかったのである。

　そして毎夜ほとんど三人か、うまくするとキィフが休暇をもらって、そのまま浜辺で溶岩焼蕎麦辛味や溶岩の素梵子力を込めたスープをプレートに流し、野菜、肉、麺類などを入れ、焼いて食べる。ゼレファス地方で多く、地域によって特色もを楽しんだ。主導するのは祭り好きのワナ君で、二人の少女はそれぞれの理由で料理道具など触れたこともなかったが、ただ用意された食材をプレートの上で焼くだけなら問題が無い。大騒ぎがあまり好きでないカルツですら、あまりにも自堕落な楽園生活のために自分の現在が意味するものをほとんど意識しなくなっていた。本能が読むことを望んでいるのか、それでいて何かが拒絶しているのか、常に携帯されているだけの文庫本は日増しに汚れが酷くなっていった。彼があれほど強く奇妙な友情を感じていた宝船もまた、出撃の機会もご主君と方々に触れられることもなく、黙って静かに真水の海に係留されて浮かんでいた。警戒警報がなり、度々上空との戦が起きたには起きたのだが、どれも前回の戦闘に増してひどく中途半端なものばかりだったのである。

「ねぇ、聞いてる？　聞いてるのってば、バカカル！」

こんな風に、新しい合成語？が星の娘の口から飛び出したのがいつだったのかも彼はもはや思い出せないことであろう。このときカルツ少年は全く奇妙な顔をした後に、噴き出して、大いに笑ったものだった。すると、彼が怒らないので彼女が怒ってしまい、頬をぷくっとさせて目と眉の間に皺をこさえたが、やはり耐え切れずにケタケタと笑い出した。

「はは…　聞いてる、またビーチボーイを引っ掛けたんだろ？」

「なぁによ、違うって言ってんでしょ。あっちから声かけてくるの、毎回毎回。ウンザリ。皆一目惚れなんですって、揃いも揃ってさ。皆そりゃかっこいいわよ。でも嫌。私、提督みたいな全部そろった人じゃないとヤなの」

その人はキィフのことが好きなんだぜ、ま、最高級同士で仲良くやるんだろ、と言うほど、今の彼は意地悪な気分にはなれなかった。「そいつはご馳走様。俺もミャンレ可愛いと思うよ。でも嫌われてるからコクらないけど」

「そうよ、アンタにしてはよくわかってるじゃない」彼女は心臓をチクッと刺された気がして胸元を思わず押さえ、ふいと歩き出した。そこから少し離れた波打ち際に他の二人が座っている。

「なんだあいつ等って、どうのこうのいって、ほんと、こっちが嫌になるくらい仲いいのな」

「あら、ワナ君妬いてるの」

　一月半ぶりにキィフと二人で話す機会を得た飛竜者の少年は、螺子切れてしまうのではと思われるほど首を激しく横に振った。「まさかまさか。俺、今が一番幸せだし」

　こともなげにこういってしまった彼は思わずぎょっとしたが、恐る恐る隣の娘を見た。翼もつ少年同様、運動全般において万能な彼女は泳げないわけではないがあまり好きではないらしく、しつこく誘うワナに困ったような目を向けて彼を大いに後悔させたのだが、それでも夏用の司祭服は彼女の美しさを貶めることなく良く映えていた。その短い袖から覗く白い肌は日焼けすることも汗をかくこともないが、雪聖種族が本能的に発動する防御術の助けがなければ簡単に熱射病で倒れてしまう。こういった特質にも関わらず、彼女は南国の海辺が嫌いにはなれなかった。だから彼女は、大好きな夕焼けに染まる地平線を見つめながら、「私も、来て良かったわ」と無垢な面持ちで答えた。

　ワナ少年は話が逸れてしまったので悲しいようなほっとしたような、複雑な気持ちでしばらく黙って指の爪で砂に意味不明なものを色々描いた。と、それをぼんやりと眺めながら、キィフが呟いた。

「私、どうしよう。結婚を申し込まれてしまって…」

　彼のお絵かきが止まり、次いでずるずると直線が続いて指が脇で止まった。「誰。提督さん」

「うん」

「…でも、断ったんだよね」

「ううん」

　ワナは思わず、海に入って二度と浮かばない術法が世にないものか図書館で調べたい衝動に駆られたから、次の言葉は何よりもの救いに聞こえた。

「突然だったから、ちゃんと答えられなくて、曖昧に返事しちゃって…　どうやってお断りしたらいいんだろう。すごく良い人だし、本当に素敵な人だけど、私なんかにはもったいないもの…」

　事実関係の認識がおかしいけど結果オーライと思って飛竜少年は否定せずに、眩暈で倒れてしまいそうな自分を奮い起こそうと爪で頬を少し突いた。「うーんと、俺の場合はそうだなぁ、確かアレだ。ごめん、好きな人いるんだ、とかいったよ。いや、いなくてもさ」

　と、顔を引きつらせて笑い、彼女の顔を見たが、キィフもきょとんとした様子で彼を見ていたので、どきりとしてその目に見入ってしまった。「ワナ君も、女の人に言われたことあるんだ。そうよね、格好良いもん、ワナ君。私、そういうの初めてだったから」

『冗談じゃない』と彼は思った。もし誰でも気づいたものは彼女の単純な誤りを訂正すべきだろうが、敢えてそうせずに外道と言われようとこの機を逃すわけにはいかぬ――ミャンレに言わせたら傍目から見て全くバカにも見えるような決意を固め、彼は隣に座る娘を力んだ顔で見据えた。「キィフ、俺…」

「あー、ねぇちょっと、あなたキィフ取りすぎよ。こっちで女同士で話しましょ、あそこのエロ本読んでる子供は放っといてさ。それとも何、シュイラーダート火神教高司祭様はワナのことが好きなわけ？」突然、二人の間に後ろから星の娘が割って入った。

「あ、ううん、違うの。いいわよミャンレ」

『え。違…』と燃え尽きたように固まるワナと、『キィフに変なこと言いやがって…』と思いつつ、かといって『これは高貴な文学作品だ』と自慢げに言ったところで好きな娘の気を引けるものではないと考えて溜息をついたカルツの目が合い、慌てて二人ともそっぽを向いた。

　ところで、一番浮いた話の無さそうなカルツ・ピルス君ではあるが、こんな彼にも恋の神様だか運命だか知らないが、偶然は時として奇妙な出会いをもたらすものである。ある日、恋する翼持つ少年が激しい頭痛を起こし、耳から脳に浸水したと大騒ぎして休養を取ったために、――十中八九、キィフに会えない寂しさをぶつけて夏雪素梵子力のバランスが崩れ、付近の冷気を司る水神の力が強まり、熱帯のゼレファスでも猛吹雪になることがごくまれにあるの日にすら入水したために風邪をこじらせたのだろう――慣例に従って一人浜に寝そべっていたカルツに、突然、見たことの無い少女が話しかけてきたのである

　彼女は砂魚種族であったが、よくよく話を聞いてみると出身はペ・ツスンテウザーポド中部を支配していたラグヒョ帝国瓦解後に独立した共和国の一つであり、各地を一人で旅して廻っているらしかった。『らしかった』というのは、彼女が話せるのが世界的にはマイナーなラグヒョ帝国由来の言葉だけであったからである。ピーナツ形の目が異国風で魅力的な彼女は、同族の同い年を久しぶりに見たらしく、彼の独特の風合いがある容姿に強く惹かれ、思わず声をかけたのであった。しかし、そのこと自体はそのとき彼には理解できなかったし、それどころかほとんど会話にすらならなかった。普通、言葉が通じなくても念話や身振り手振りでおよそ通じるものだが、少年が彼女の話す語を趣味でかじっていたのがかえって災いした。

　カルツもまた彼女の旅人としての人見知りしない性質や、自分に興味を持ってくれているという初めてに近い経験によって彼女に好意を感じたが、そのために何とか格好良く撫府語を使おうと息巻いた。しかし、どうやっても通じない。焦るばかりだったが、優しいその娘は真剣に話を聞こうと根気強く待ってくれた。それがかえって彼を焦らせ、ついにはいつものごとくあきらめてしまい、身振りで、ごめんわからない、と苦笑いをしたのだった。

　寂しそうにその場を離れた砂魚の娘の背を見送った後、彼はこだわりを捨てて念話を使えば良かったのだと気づいた。してみると、彼女がもしかしたら自分を好きになってくれたのかもしれないことなどが不意に理解されてきた。そもそも、どうやったらわからないで間抜けな対応ができたのか不思議で仕様が無いくらいで、激しく後悔せざるを得なかった。明日こそは、と彼は思った。しかしながら二度と彼女に会うことはなかったのである。

　これはまた、彼の貴重な聞こえの良い恋話をするつもりが失意の結末となってしまったのであるが、おかげで彼はいつものネガティブ思考をさらにひどくして、もう何もかも嫌だ、おっさんどもは薄汚い裏切り裏切られる政治と戦争、金、金また金のやりとり、友達は勝手気まま、本は読み進まない…と、浜に行くことは少なくなり、ミャンレに罵られようとワナに煩く呼ばれようと、無視して自室に閉じこもりがちになり始めた。だが、そうやって逃げようとすればするほど、一度は克服したかに見えたキィフへの憧れは強まる一方なのであった。

　カルツが読んでいる教養大河小説には、その物語の進行における特質のために、時間の流れ方やその性質についての講釈にも近い話題がいくつもある。まだこの小さな読者が全く達していない箇所にあるその部類の話を引くまでも無く、時間の感じ方は観測者である人それぞれで、特に楽をしていると早いし、辛いと長く、この感覚の差は実際の客観的時間数量のそれを時として超過することもあるほどに個人の精神にとっては重大な影響を及ぼすことは自明のことであろう。彼が踏みつぶしてきたサディンカプルでの三ヶ月間は最初の一週間よりも短かった、と言い切ってしまうとしても、響きは全く間違っているが、事実を表すにはこれ以上の書き方もない。

　こんな表現は、本稿における著述能力の巧拙に関して恥ずべき致命的得点を導き出しかねないとはいえ、客観的な天減周期表いわゆるカレンダーのこと。クナウザスでは古くより共通して12ヶ月制を採る地域が多いが、北地域では偶数月が、南地域では奇数月が二十日間しかないことに注意しなければならないを見やれば、いつのまにか雨季が始まる九月となっていることを誰しもが同じく認識できることだけは間違いなかった。軍事面と外交政策の度重なる勝利によって熱帯の若い王国は益々の活況にあり、『黒い巨人』はこの間に他国と更に兵器の質面でも差をつけるため、彼が得意とする遺跡探検を計画、この月の初めに実行することとした。とはいえそれは、数百万年後には英雄と盗賊が混ざりあって良くも悪くも人の目を引く職業となる踏破家業のする仕事が慎ましく見えるほど大規模なものであって、防衛軍から百人ほど調達され、アルシュマイナーを隊長とし、ぞろぞろと隊列を組んで密林へと出かけていった。

　一度や二度『お断り』されたところで全くめげないところがどこか健気な、『全て揃った』男によって当然のごとく誘われた乙女の呼びかけで、隊長としては特にお呼びでない三人も胸をわくわくさせてこの遠足――浜辺の生活に飽き始めていた彼らには、大人の仕事もこのようにしか感じられなかった――についていった。しかしカルツとしては少々複雑で、キィフと再び特殊な仕事の中で暫らく生活できること自体は嬉しくても、こういった熱帯雨林での冒険が少し気味悪く感じられて、百害あって一利なし、という風にも思われていたから、彼らが兵士達の隊列の真ん中に囲われていることについては、手分けして探したほうが良いのに、との意見を持つ級友とは逆に、ありがたく感じられていた。

　この大規模な探索の目的は、かつて火神軍に仕えていた――というよりも屈服して使役させられていた龍人族の住処を流用し、七千五百万年前に生活していた大蟹人の遺跡を探すことであった。大蟹人と聞くと今ではほとんどの人が御伽噺の絵本などの、子供を鋏で抓む怖い鬼を思い出してしまうだろうが、実はまだ少数ながら現在も密林の奥で生活しているということなのである。生態は謎に包まれているが、その祖先はかなりの梵子術能力を持ち、創世代の文献を元に、龍人の残した素梵子加工装置を駆使して加環を初めて大量生産し始め、世界中の巨人族へと術による超時空転送販売していたことを、キャンプの中でローテンハイツ隊長から聞かされた子供達の一部は『うそ臭いなー』と思いつつ、大仰に頷いて見せた。

しかし、皮肉にもこの交易が彼らの国を滅ぼしてしまったのです、と彼はたくさんの腕を使って身振りを交え、説明した。加環などの技術や資源を知って欲に駆られた青瘤取族が北部から怒涛のごとく流入し、争いを知らなかった南国の巨人族は無抵抗に虐殺され、その生き残りは技術と他種族との交流の全てを忌み嫌って奥地に閉じこもってしまった。今ではその略奪者達も、追うようにしてディアネムル大陸南西部に住み着いた瘤取種や、元来主流だった飛竜者族をも征服しようとして逆に滅ぼされてしまった、とのことであった。

この加環と加工装置を見つけるために天然の迷宮である密林の中に溶け込むように点在しているであろう遺跡を探したいが、大蟹人そのものとは遭遇しないように、彼らはあらゆる知的種族を嫌っているだろうから危険だ、と子供達は半ば面白半分の脅しをもって忠告された。

しかしあなたのことだけは必ずやお守りします、第六位階司教様――キィフの才覚は誰しも認めざるを得ず、とんとん拍子で、すでに七高位中にすら入ってしまっていた――等といった彼の付けたしには、このとき既に他の三人全てがうんざりした顔しかしない。それを感じて少なからず嫌な思いをしている雪娘は「ありがとうございます、提督」と、以前星の皇女にしたような返事だけをするのだった。

ようやく自分の落ち着ける場を見出しつつあったサパニ・キィフ・シュイラーダートであるが、そのために掛け替えないと感じている友人達から離れざるを得ないことは常日頃のジレンマであった。ゆえに三日ほど行進し、早速疲れと飽きが見えてきた三人に、『今夜抜け出して私達だけで探しましょ』と大人しい性質に見える彼女らしかぬ提案をしたのも、彼らに再び近づきたい一心からであった。無論、少年達の想いやそれゆえの苦さを味わっているミャンレの心中を知っているならばそのような気回しの必要性は全然なかったわけであるが、ともかくそれは面白そうだと誰もが思った。

そもそも自分達は彼らの家来でも何でもない、『陽折牙の精神は風の自由』と、ふと宝船のことを思い出したカルツが得意技の出鱈目なことを言ったので、ワナとミャンレは「何それ、意味わかんない」と貶しつつもある部分では納得していたし、キィフに至っては陽折牙の説明をこの少年に求めた時のように強い興味を隠さずに何度も頷いた。「風よね、風…　知ってる？　火の神様は風を喜ぶの。お互いにあまり関係ないそぶりをしているのは、互いの破壊活動を尊んで邪魔しないようにするからなんですって」『あ、破壊活動、なんて』と彼女は口を引きつらせてしまったが、すぐにワナ・クヴァイが話に乗った。

「嵐系の属性術法だろ。熱の攪拌、置換エナギー変異、エントロピー…　何だっけ」知的なところを見せようとしてボロが出てしまったようだが、誰も彼を笑わず、それぞれにこれから始まる『本当の』冒険に期待を膨らませていた。

百人強者揃いということで、出会う怪物もまるで軍隊蟻のように囲んで切り刻んでしまうような探検隊であったから、夜は毎夜周囲を気にせぬ大宴会である。だから、この隙に抜け出すのは何ら難しい技を要しなかった。あとは、この後どういった大騒ぎになるか、という問題なのであるが、この子等は四人の署名を最後に加えた次のような紙切れ一つでそれが解決すると思っているのだから仕様がない。

『私達には少しレベルの高いお仕事でした。お邪魔にならぬうちに元来た道を帰ります。道中は司教の術で護りますから、ご心配には及びません。隊長以下皆様の偉大なる作戦が大成功に終わることを確信します』――ローテンハイツ隊長の青ざめる顔が目に浮かぶところであるが、主人公たる人々が全くそれを意に介していないようなので、一先ず考慮に入れずにその逸れた道筋を追いかけてみよう。

彼らはカルツが術で灯す明かりを頼りにどんどん思いつく方向へ進んだ。それもそのはず、家庭教師から天空系の術を好んで学んでいたミャンレ・フリスロッツ――ミャンレ・ルクシュトとは表記変更をしないことにしよう。なぜなら彼女は未だ義理の父に対する恋慕を忘れられないようで、探検隊の名簿に記載するときもフリスロッツ、とサインしていたのだから――の『星座見下』の術法によって、星の見える夜沈星が邪魔で見えなくなった星座もあるが、当時は沈星の位置情報を占いに取り入れる手法が開発されていたにさえなれば自分達の位置は陽折牙のナビゲート無しでも、大雑把に知ることができたのである。これは、磁場が狂っている場所の多いゼレファス南東部では非常に有効な手段であったが、一定の才覚と特別な訓練を必要とする天や時空の術法を使える人は世界でも多くなく、お客さん気分の少女が名乗り出なかったために探検隊は地道な地図作りを余儀なくされていたのだった。

どうせどこにいけば遺跡があるのかわかりそうにもないので、彼らは比較的安全な昼に目いっぱい移動して、夜には現在地点を確認して休息する方法を取りながら、遠回りをしつつ密林東北部の村に出るつもりであった。そこから馬車で帰れば大部隊に先を越される可能性はありえないと思われた。

だが、ヴェシュマや陽折牙が優秀な卵殻となってくれていた時とは違い、そううまくいくものではなかった。４、５日歩き回っても、何か面白いものがみつかるどころか出口方面に近づくこともできず、むしろ少しずつ遠ざかっているらしいことが毎夜判明し、しかもそれすら、雨の多いこの季節であるから詳しくわからないこともあった。毎夜浜辺で美食に明け暮れていた子供達には懐かしい保存食も楽しく思われていたのだが、それもあと僅かとなり始めた。

それゆえ、怪物に出会っては戦わずに天術士の時空遮断系術法で逃げ回っていた彼らも、食べられそうな生物はキィフの術で焼き殺してみないといけないのではなかろうか、という意見が誰からともなく出始めた。彼女も自分が持ちかけたことの責任を痛感していたので嫌だというわけにもいかない。例えば木々の上から蒔猿の群れに襲われたとき、武装や戦闘技術を一気に強化させる高等術法の支援を受けた子供達は遠隔で操られたヴェシュマのように嬉々として戦い、敵が逃げても執拗に追いかけて７、８匹捕まえ、丸焼きにしてしまった。

さらに、ワナ・クヴァイが飛竜者部族に伝わる熱帯で生きる知恵を活かし、森の果実で食べられるものや毒になるものを分けて有効活用した。こうして食料はなんとか確保できたものの、危険な怪物が多数生息すると言われるこの地をいつまでも自由観光しているわけにもいかない。彼らの必死さだけでなく、その年齢相応の成長の早さも手伝って難しい探検活動に慣れ始め、ミャンレが星座で占うところによれば、彼らは次第に拠点の方向へ近づくことができているようだった。

八日ほど経っただろうか。このような状況にも拘らず、やはり彼ら、である。ゴウゴウという音が魔物の叫びかと怯え、「カルちゃん、嫌だ、もう今すぐ帰りたい」と目の上の小さな一本皺を深くしてしがみついてきた星の少女を振りほどいて、遠くの山に見えた小さな白い線をカルツは指差した。

「ただのだって。強いて言えばおいしい水でも飲めるんじゃない」

「のど乾いた」せっかく大サービスで、年増のキィフちゃんより素晴らしいこのを押し付けてあげたのに、と不服そうなミャンレだったが、『おいしい』という言葉に強く反応したようだった。沈星には水が少ないため、時空置換系術法を組み込んだ装置で海洋から吸い上げている、機械を通した調整水道水ばかり飲んでいる星の人間には、確かにこれ以上のごちそうはないのかもしれない。

「うん、見てみたい。きっと綺麗よ」

『君より美麗なものが世の中にあるとは思えない』などと言えるほど気障でもないワナ君だが、例のごとくキィフの意見に反対するはずもなく、四人はさっさと進路を変えて山に登り始めた。

　先日中彼らを閉口させた酷い雨によって斜面はかなり濡れていたが、久しぶりに天気は爽快に空域中のような青だけを示し、じりじりと暑く、羽虫がチクチクと彼らの血液を狙った。ミャンレは『痛い、痒い、疲れた』を何十回と『カルちゃん』に繰り返して彼を苛立たせたが、その度に火神に仕える乙女に色々な携帯薬を塗ってもらったために、『この娘ってば悔しいけどちょっと可愛いの』と思ったり、忙しい。

　サディンカプル王朝以前、この地域には五百を越える少数部族が争いあっていたといわれるが、そのいずれかの生活の名残だろうか――人より大きな葉を掻き分け進んでいた道なき道に、小さな獣道のようなものがところどころぶつかるようになり、ついには四人並んで歩ける開けた登山道のようなものがうまい具合に滝を目指して伸びていた。ご丁寧に大きな石も埋め込まれていたが、これは苔生して滑りやすく、かえって歩きにくいくらいだった。

　道はぐねぐねと無闇に折曲がり、砂魚の元作業員に配線の束を連想させた。運動は得意だが種族的に足があまり強くないワナが一番辛そうで、時折翼で飛び上がってみたが、そうすると今度は腕まで疲れて逆効果になるだけだった。一方、意外に頑健なのが、やはり遺伝的な理由でカルツ・ピルスであった。彼は一行のリーダーのようにぐんぐん進む自分にかつてない誇りを感じ、『ふむふむ、皆して難儀だ。俺がしっかりサポートしてやらないと』と得意気な様子で休憩や進行の音頭を取った。

　ついに滝の上まで登りつめ、あとは少し降りるだけというところでワナが鉤爪を押さえて泣きそうな悲鳴を上げたことと、ミャンレの愚図りが頂点に達しつつあったこと、それに夕暮れに差し掛かっていたこともあって、今日はここで泊まろう、と彼は平坦な地を見つけてテントを張り始めた。その日も、良く焼いて保存用に仕立てた猿肉と毒ではないらしい茸に塩をかけただけでむしゃむしゃ平らげると、兵士達と歩いていたときには恒例だった夜話に盛り上がることもなく、疲れを癒すためにさっさと眠りについた。ここで格好付けないでいつやるのだとばかりに見張りを買ってでたカルツは、小さな焚き火を眺めながら、『火か…　火のキィフ…』と、彼女の愛らしい寝顔を時折そっと見やった。

　と、その顔に近づいていく小さな小さな影の揺らめきに気づいた。ただの亀虫だったが、かといってこれは無視できないと彼は思い、「殺しゃしねぇからあっちゃ行けず」と親しげに方言で呼びかけた。

そして腰紐に、嫌なことにも多少の思い出と考えて挟んでいた婉曲パイプの切れ端を掴んでぱっぱっと地面を擦るようにし、虫を藪へ跳ね飛ばそうとした。だが、地面は見かけよりも硬くてごつごつしており、小さな影はその中にもぐりこんでなかなかうまくいかない。「あれ、この、おい」次第に力が入る。ようやく、ひょいと軽く跳ねた。それは自分の体がさも重量金属であるかのようにほんのわずか飛んだだけでひっくり返ってしまった。

　彼はしばらく黙って自分の顔を薄暗い橙色に染めていたが、事態の変化が見られないのでやおら立ち上がり、すでに命の灯火を吹き消されてしまったそれの上にしゃがみこんだ。「おめ…　死んだか、けっ」歪んだ顔の真ん中辺りに苦しい力が溜まりつつあったので思わず眉間を指で押さえる。葬ってやるか、と藪にもう一度金属管で叩いたが、今度は勢いが強すぎて、ゴミごと斜面を転がってどこかに見えなくなっていった。

　火はくすぶり揺らいで今にも消えかかっていた。彼はそれに何か加えてみようともせずにじっと、消えていく様子を見つめた。そしてついに闇に溶け込んだあと、呟いた。

「俺、あの虫ケラのためにどんな責任が取れるだろう」――ああ、戦慄せよ人間達――この、社会的な常識という必要性が未発達のまま放置された少年の中から、原始的な過程を通して頭をもたげてきた『責任』という概念は、果たして我々が知るようなものではなかったのだ。当然ながら、戦場で死にに来たようにして彼の生存のために空の露となった無数の人々に関して、彼はそれを持っていない。自然の連鎖系から外れて久しい自己完結型の社会が引き起こしたことは、めくるめく快楽と金を経由させるだけの循環消費部品の一つ一つが『責任』を持たなくてはいけないのに――このような内容が、小さく不毛な死について意義を与えなければならないと感じているらしい少年が携帯する小説の、前半の端書しか読んでいないのだから当然だが、未だ達していない下巻後半部に述べてある。

　あまりにも偉大な文学的業績を残したため、最高位に近い貴族の称号を時の権力者から授与された著者のコトー・ジューガク本人が述懐して曰く――『若き日々、この書を書くため、私はなるべく社会に迷惑な後遺症の残らない形で犯罪や不幸を自己体験しなくてはならないという使命感に燃えていると、誰か私の人生について詳しい人に指摘されたとしても全く否定することができない状態でした。しかし誓って言いますが、私も当時は理由もわからず苦しく、ただただ必死だったのです』しかし、と彼は続けた。『もしそうだとしたら、どんな神が、一体何のために、私という逸脱した人形をお造りになったのでしょうか』

　カルツ・ピルスもまた、ジューガクのような一部が栄光に包まれて帰ってくるであろうと期待され、大量に放出された小さな尾びれで泳ぐ者の一派なのだろうか。その彼が口にした『責任』――この場合、虫が死んだから責任が発生したのではなく、責任が先にあり、それにどうでもいい現世的な理由を与える上申書を書くために罪の現象が作られたのではなかろうか。なぜなら彼は眠りの中にこの哀しさを忘れさせてしまったが、心の深層ではいつまでも覚えていて、来るべき最期の刻にはっきりとそれを思い返すことになるのだから。

　明くる日の早朝、若干寝過ごして朝日を見ることはできなかったものの、彼らはようやく滝にたどり着いていた。岩盤を激しく削って、突出する岩のためにいくつかに分岐した滝は、周囲にものすごい水飛沫を雨のように巻き上げている。彼らはその細かい粒によって衣服も髪も顔も問わず全身じわじわと、完全に水浸しにされながら、滝から見て左側の、中腹の大きな岩の上から滝つぼを見下ろしたり始点を見上げたりした。誰もがはにかんだり身振りで興奮を表し、友人に滑るから危険だ、と止められたりしていたが、ほとんど喋ることは無かった。ここは皇女を怯えさせたあの音の発生源であるから、耳元で大声を出しても聞こえにくいほどの状況であったのだ。

　水は濁流となっていて、あまり飲む気が起きそうなものではなかったが、ミャンレは体全体が優しく水滴に包まれ、苦痛や疲労がすっかり癒えていく感覚を幸福に感じていた。「来るのは大変だけど、滝はねぇ、今みたいな雨季のほうが綺麗なんだ」と、初めてこういった自然のモニュメントを観ているワナ・クヴァイが知ったように言ったが、誰も聞いておらず、キィフだけが大きく手を振って何も聞こえないことを律儀に示した。

「あ、虹」と、カルツが滝の向かい側の空間を指差した。木々の間を縫うようにして、まさしく掴めそうな位置に、小さな七色の半孤がかかっている。皆は多いにはしゃいで、実際に触れようと手を伸ばした。だが、あと少しというところで届かない。砂魚の少年が両腕を横にばたつかせるアクションを級友に示す。しばらく首を斜めにかしげていたワナだったが、とたんに気づいて、後ろから押してあげようとする砂魚の少年と揉みあい、『無理だ無理だ』という仕草をする。

　カルツは、『確かに悪くないけどそんなに良くもない』と思ったが、本来は遺伝的に水の素梵子に縁が深い娘がうっとりと目を閉じて両腕を開き、飛沫を楽しそうに受け入れているのをみて満足気に微笑んだ。…が、ちょっとするとすぐに目が水で一杯になってしまうので幾度も袖でぬぐわなければならない。その服も絞ればそこに小さな滝を作れるほど保水している。

　しばらくの水空気浴の後、この涼しい場所を一番楽しんでいた雪聖が、もし隊長が先に帰ってしまったら大騒ぎになることを思い出し、滝はまた来ればいいと考えて皆に戻らねばならないことを示した。ずぶ濡れのままびちゃびちゃ音を立てて彼らはもと来たぬかるみの道を石と木の根を足がかりに、時折左右の小さい草木に捉まりながら登っていった。しかし、蒸し暑い空気がすぐに服を生乾きにしていく。

　周囲でガサガサとなり、またもミャンレはカルツにしがみついた。「うへ、べたべたして気色悪い、離れろよ」と口ではいったが、憧れを口実にして星の少女からの接触から逃げているようでもある彼の胸中では、透けて見える彼女の衣服の下を意識しないようにしても難しく、その証拠として波紋が服の水分を伝っていくのではないかと思うほど心臓が高鳴っている。だが、星の娘はいっそうひどく、痛いほど絡みつき、少し長めにしている爪が彼の硬い鱗状の皮膚をすら傷つけるほど食い込み、ギリギリと引っかいた。

　しかしそれも、彼女の十分に理由のある恐怖感ゆえのものであった。叱りつけようとしたカルツも、はたとその場に立ち止まり、カタカタと震えだした。自然と四人は背中を合わせるように近づきあう。周囲を取り囲んだ巨大な人影たちも、じりじりと近づいてきた。彼らはぼろ布を身にまとってはいるが、ほとんどが丸裸で、浅黒い肌をしている。様々な顔や体格の者がいるが、全ての個体が共通して両腕に大きな蟹鋏を持っているから、これらが血縁か仲間同士であることが一目でわかる。

『サイアクだ…　そうだ、今まで昼も、夜ですら危険な奴らに狙われなかっただけでも運が良かっただけだ。ここ、ゼレファスの森なんだよな…』ワナが、キィフに目配せする。「俺が引き付ける。時間をかけてもいいから、君は強い炎柱を周囲に放てるかい」

「待て、まだ待て」ヴェシュマみたいにぼんやりした目をしている連中だと感じたカルツが一歩を不用意に踏み出した。仲間達がびくりとするが、十体ほどの怪物たちは動じず、彼に目線を一斉に注いだ。

『大蟹族？　僕は砂魚のカルツ・ピルス。中央大陸から来ました』彼は、全員に対して念話を試みた。イメージが直接に伝わるこのデバイスでは言語が通じなくても知性の高い生物とはある程度の交渉ができる可能性がある。だが、心術も梵子術の一系統であるから、精神力の消耗は免れない。これほど多くの相手と同時通話の回線を開けたのは、もちろんあの秘石のおかげだとミャンレ・フリスロッツが気づいた。『やっぱり、有機的干渉をかけるときは梵子臭いっていうか、いつもと違う。何で使ったり使わなかったりできるんだろ、カルちゃんに聞いてみなくちゃ』

しかし今は当然それどころではない。話が通じたのか念干渉を攻撃と受け取ったのか、飛び出た眼がぎょろぎょろと大きい個体が、大柄な彼らの中でも一段と太っている体躯を揺すりながら彼のところへよたよたと来た。カルツは出ない生唾を飲み込もうとして喉を痛めながら、それでも逃げればかえって相手を刺激するだけと思い、その場で干渉を続けた。

『僕の言葉がわかりますか。何か話していただけますか』彼は、様々な言語を覚えるなど世界の悪趣味の中でも最も価値がないと思っているが、どうもそれはお得意とする面倒からの逃避のようで、追い詰められるとこのようにやたらと言語にこだわり、その意義を重んじる性質を露呈する。詐称された感動の信奉者達ほどそれに疑いを挟むものだが、どのような形態であれ言の葉こそは文明の始まりであり、精神の第一勲章であり、彼がその門前でうろちょろしている文学という仕事の全てである。砂魚の少年は状況を忘れて、彼らの知られざる言葉の発音を生で聴けたらどんなにか興味深いことだろうと思った。

　だが、相手は何も話さず、片手の鋏を素早く振り上げた。ワナが「あ、こいつ」と言って国境防衛軍からもらった剣を抜いたが、カルツは振り返って、「やめろ、ワナ！」と小さく、しかし鋭く言い放った。

『…おかしい、心に入れない。でも何か聞こえてくる…　まさか』カルツ・ピルスは、前にブルスタ親方の考えが読めなかったことを思い出していた。しかしそれゆえに、彼は前々から密かに研究していた考えを立証できたように思った。最初に慌てて思念干渉したときは精神の流出と流入が激しく行われたのでこれが普通なのかと思っていたが、実はそれ自体は彼や星の少女が発した心術を補強しただけの、付属的効果でしかないようだった。つまり、単純かつ大きな勘違いではあったが、石の力で人の心が読めるわけではなかったのである。

『ということは、いつも通りに…』相手を人間の理知であると思わず、自分の心術経路を閉じたときに、『声』が周囲からがやがやと聞こえてきた。しかしそれは、完全な無機質達よりも独自の言葉を持つゆえにこんがらがっていてわかりにくいというか、やはりさっぱり理解できないことはほとんど変わらなかった。

　だが彼はあきらめなかった。仲間達を窮地から救いたいという一心、からではない。彼は、目の前の人々を理解したいと本気で欲していたし、社会から逸脱するしかない性質を持って生まれた畸形的精神と様々に言葉と口を変えて罵られ続けてきた彼にとって、あらゆる未知との出会いは新天地への入り口と感じられていたのだ。ある猫者の著述原稿に斯く有るごとくに――どのような優れた種も、最初は実にたわいもない、たまたま産み落とされたような奇形児であったのですが、それが追いやられたり失敗したりしながらも必死に迷走した結果、気づいた時には強い自分を見出していた、という具合に進化してきたのである――

『＝Я＊＄…』首を左右へと振り子のようにさせるのと交互に、長く突き出た目を上下させていた眼前の鋏人が、不意に周囲の仲間達に呼びかけたようだった。すると、どっと歓声のような悲鳴のような叫びがあがって、どしどしと音を上げて全員が包囲を狭めてきた。思わず硬直して武器を握り締めたり術印を組もうとする友人達に、カルツは笑って近づいた。

「大丈夫、よくわかんないけど、僕たちに興味を持っているようだ。悪い人たちじゃない、いやそれどころか…」「俺達がどんな味がするか聞きたいんじゃないのか」顔を歪ませて緊張するワナが悲鳴を上げた。鋏が彼の眼前に突きつけられたのだ。

「やられる前にやってやる」と彼は剣を挟みに打ちつけようとしたが、それをコツリと殻に当てただけで、神妙な顔になってしまった。

「くれる、って言うんじゃないのかな。もらっときなよ」と、太った奴と必死に身振りと念のイメージで会話を試みていたカルツが振り返った。翼を緊張で振り上げながら、彼は鋏の中から気合一閃とばかりに小さなものを抜きとった。それは、よく焼かれた三角兎の丸焼きであった。巨大な歯ブラシを噛み合わせたような口をうじゅるうじゅると言わせ、時折唾液を垂らしながら、渡した者がしきりと鋏を上下させている。「わかんない？　だからさぁ、食べてみろっていう…」

「黙っとけよ、んなこたわかってる！」彼はエイヤと唱えてかぶりついた。…一口、二口、と進んでなかなか止まらない。「少し、いや、かなり辛…」しかし味は悪くないようだし、この健康的すぎるほどの若者は常に腹をすかせているといってもよいくらいなのだ。カルツは子供を抱いたご婦人？から別の食物を受け取って既にもぐもぐやっていた。その見たことのない生野菜もまた辛味が強かったが、彼は辛いものなら子供の頃から精神を刺激する唯一の嗜好として受容していたから、『こんなに美味いものは食べたことがない』というのを伝えようと色々試行錯誤した。

女の子達もそれぞれに恐々受け取ったが、南国から教団経由でスパイシーな食事を経験していた雪聖はともかく、溶岩焼きでもいつも香辛料を避けている星の少女にはどうにも辛くて、何度もひどく咳き込んだ。慌てて筋肉質の大蟹人が来て、鋏から直接に水を彼女の目の前にこぼし始めた。体の中に溜め込んだ水のようで、体液にも見えるから、彼女は要らないと手を振ったが、断りきれずに少し手で掬って舐めてみた。…やはり少し塩辛い。彼女は有難う、と小さく言ってキィフの後ろに隠れてしまった。

　そのうち、鋏人達の数人が集まって、もっと何かうまいものを客人にふるまってやろうということになったらしい。一人が丸い小さな石の輪っかを取り出すと、大きな葉を切り取ってきてその上に置いた。そして、女性と思われる、多少着飾った二人がまだ生きている魚を水と一緒に口の中から吐き出し、これを輪の上に置いた。すると魚はぱりぱりと音を立てて全体が綺麗に焼けていく。『おい、アレ…』兎を骨だけにして、まだそれをしゃぶっているワナがカルツに耳打ちした。「…だな、すごく小さいけど間違いない」

　砂魚の少年は背中の荷物袋をごそごそやりだした。これはエレシュマサディンカプル首都近郊の街のショッピングモールで買ったもので、小さいがなかなか使い勝手がよく、『陽折牙みたいだ』というわけでお気に入りの品である。その間に首尾よく焼けたらしく、次々と遠赤外線で調理された川魚が鋏で手渡された。これは味付けがされていないが、素梵子力を利用した器具によって素材の味が十二分に引き出されていたから、皆笑顔でほくほくとかぶりついた。飛竜者や砂魚はバリバリと頭から噛み砕いてしまったが、ちょっとお上品な種族である少女達は骨や皮を必死に取り除いたり、肉をこぼしてしまったりでモタモタしている。

それが面白いらしく、鋏人達は身振りで食べ方――といっても、彼らのそれは明らかに単なる丸呑みを指していたが――を示したり、大いに笑ったりしていた。ミャンレはバカにされたと思って表情を歪ませていたが、カルツは彼らが、若い娘達が食事を楽しんでいる様子を人懐っこく眺めていることを知っていた。

さらには酒までが葉を結わえて作った入れ物で振舞われはじめた。しかしその強い匂いは子供達をあまり喜ばせず、ミャンレはしきりと、水を頂戴、と遠慮なく鋏を叩いた。そしてそれをもう恐れずにごくごくとやった。相手はよほど嬉しかったらしく、星の少女の前で小躍りを始め、彼女の肩に目を置いた。少々不気味な印象だが、このような、弱点でもある重要な器官を触らせるということが、彼の底意のない友情を示す態度であることは、誰にでもなんとなくわかることである。

「あ、あったあった。ねぇ、これと交換しませんか。文化交流として」いつもは口もつけない酒を気分よく飲みながら、砂魚の少年は赤ら顔で自分のフォークやナイフ、木の皿を差し出した。『ちょっと詐欺臭いかな…』と思いつつ。

　太った鋏人が瞳を興奮させてしばらくぐるぐるとやったが、恐る恐る手を伸ばしていく。しかし、筋肉質の男と、せむしの者がぱっと横から出て、それをカルツの手から奪ってしまった。大柄な奴が『ずるいぞ！』とばかりに彼らを追いかけるが、フォークを取った奴は『取れるものならどうぞ』とおどけたステップを踏んで木の後ろに跳ねていく。一方、皿とスプーンを手にした奴が少年の肩を鋏で何度も叩いた。これはかなり痛かったが、カルツは笑って我慢した。どうやら、何に使うんだ、と聞きたいらしいので、少年はそれを取り返してスープを掬う仕草をし、再び彼に渡した。彼も真似して泡だらけの口に空のスプーンを運ぶ。

「そうそう、それなら俺達の国のレストランでも全然恥じないね」

「★Эж！」大喜びで何度も同じ真似を繰り返す比較的小柄な鋏人から大きな男がそれを取り返し、自分もやってみせる。カルツが合格のサインを出してやる、すると彼もまた一回転して喜びをあらわにし、すぐに頭を下げて小さな加環を拾い上げ、カルツに渡してきた。

どの種族でもやはりおしとやかなことが尊ばれるのか、遠くで優しく微笑むようにして見守っているのはほとんどが女性のようだったが、彼女らも近づいてきて、他の３人に自分の持つ加環をどんどん渡してきた。子供達も慌てて自分の持っている食器やアクセサリー類など、可能な限りやったが、貰い物に匹敵する価値のあるものは持っていなかった。

「こんなにもらっちゃっても、武器になんないし。それに、あげれるのがもうないよ」とミャンレが肩をすくめ、カルツ・ピルスに助けを求める視線を送る。彼は今ままでの人生で一番の優しさに心を充実させていたから、彼女を包むように見据えた。

「この人たちは何もかもが嬉しいんだよ。価値とかは関係ないんだ」

彼の様子と発音が、星の娘の心臓を甘くぎゅっと締め付けた。それは、苦しいことだから、カルちゃんはアタシを苛めたんだ、と彼女は無理やりに考えたが、頭の中が霞かかったようになったために彼の名前が一瞬わからなくなって、思いついた悪態はこうであった――ママのバカ、バカバカ大っ嫌い…

――ウソ。嘘だよ？　違うの、ホントはね、ママ、アタシね、ママのこと、だい…

そう叫ぶ寸前で、彼女ははっと我に帰った。しかしどうやら小さく呟いてしまったようで、他の者達がそれぞれに、七色の橋のように光る加環に見入って彼女の様子に気づかなかったことを確認し、ほっと胸をなでおろした。

『ここだったんだ。今までは南国なんで興味なかったけど、まさかこんな簡単に、近いところに、僕の本当の故郷があったなんて』

カルツ・ピルスは、友人達に自分が涙ぐんでいることを悟られまいと顔を背けながら、辛味が染みたそぶりをしてみせた。そしてもう、自分はここに住んで、この姿は不気味だけど妖精のような無邪気な連中と一緒にのんびりと、自分の体が朽ちて大地の構成要素として還っていくまで暮らしていくのだ、それが正しさなのだと確信した。これ以上の正しさは世界に有り得ないのに、人々は新しい正しさを捏造し、いつしかそれを常識という名で共有して暮らすことを覚えた。時折起きる犯罪も、戦争も、そういった小さな矛盾点から発症する、ごく当たり前の現象に過ぎない――でも、少なくとも僕とこの人達には、一切そういった馬鹿げた面倒ごとは関係の無いことなのだ――

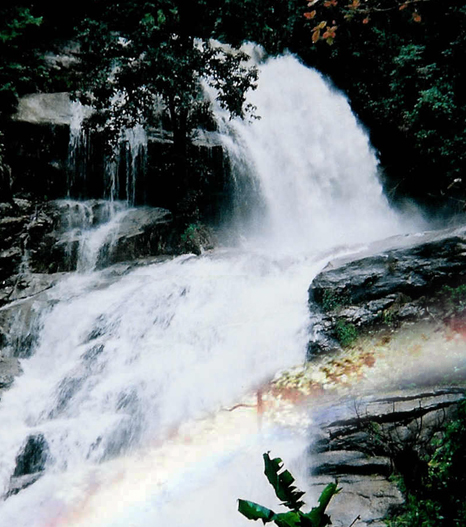
　しかし現実には、彼は自分の世界へと帰らねばならない宿命なのである。友人達が疲れ始め、彼を急かした。カルツはぎゅっと目を瞑りながら、『また来ればいいのよ』というキィフ達の説得に納得せざるを得ない。最後に、別れを惜しんだ巨人の男達がかなり長く追いかけてきて、『これ以上来ると、人に見つかって良くないことになりかねない』と、少年達が押し返してやらなければならなかった。

そのような全てがカルツには切なく感じられた。あの太った男が本当に最後の最後というところで目頭を押さえながら、彼の背を痛むくらいに叩いて滝を何度も、小さな加環を握った鋏で指した時も、哀しすぎて少年はほとんど相手を見ることができなかった。

「…良い人たちだったな。カルちゃんのおかげで、最高の思い出ができた」ワナ・クヴァイがぽつりといった。それには無言で頷き、『滝を見に行きな、綺麗だから』と、交感したイメージから推測して訳した彼の言葉を、貰い物の穴を覗きながら砂魚の少年は反芻した。

『もう観たからさ。でも、観てあげればよかったかな。無視したと取られただろうか』彼は、いつか浜辺で会った同族の少女のことを思い出した。『でも、あの時とは違う。あのコとの失敗のおかげで、勇気を持つことができた。彼女にも感謝しなくては』――しかし、別の何を考えていても、あの別れのシーンが脳裏にリプレイされる。よほど悲しかったに違いないと自分でも思われる。あの鋏、怖い鬼の武器、でもその実はとても優しい、そして、小さくて何よりも優れた食器兼調理用具を挟んで、――加環を挟んで、滝を――滝を？

　彼は思わず「そうだったのか！」と叫んで、すでに寝付いていた仲間達の、そんなことでは起きやしないワナ君以外の寝ぼけ眼で非難された。だが、彼は少女達だけでなく、ワナをも叩き起こした。

「加環だよ。彼はそれを教えたかったんだ。巨人の遺跡は、滝の裏側なんだ…！」

「何てこった。戻らないと」もはや帰りの予定をあまりにも過ぎていることも忘れ、飛竜少年が寝袋から這い出してきた。

「何言ってる、駄目だ。それより俺達の足跡が、この密林の中じゃすぐ消えてしまうのはせめてもの救いだ…」

彼は、滝を見つけたのが自分達で、兵隊どもでなかったことを何か適当なもの、この場合はとりあえず最近引っ張りだこにさせてもらっているキルケス神に感謝した。